もったいない・おかげさま・ほどほどに、が環境と人間を育てる

M・O・H通信

もう

M·O·H communication

26号
2010
Winter

特集：買い物「社会参画」

Vol.26
2010 Winter

contents

目次

特集「買い物」―社会参画

M・O・H対談 1
『感じる力』を育む世界へ　今森 光彦 & 内藤 正明……5

ショート・ショート
ふれあい　第16回『海辺詩人』　中井 二三雄……14

M・O・Hレポート 1　百年後も存在する企業であるために
『地球を守る』パタゴニアという会社　篠 健司・柿原 貴行……15

M・O・Hレポート 2　無理はせず、楽しく、気は抜かず
160年の暖簾を受け継ぐ「八百與」の商い　小倉 秀一……23

M・O・Hレポート 3　環境を生活の柱にあなたの夢を実現させる時
MOH通信・買い物アンケート……29

あんなところにも　こんなところにも　M・O・H　もう　モウ～！……32

M・O・Hレポート 4
手作り市で売る、買う、表現する　浦谷 誠人……33

旅を楽しみ自然にいやされパワーアップ……41
「くつきの森」を楽しんできたはなし　西本 椰枝……42
「秋の夜長を楽しむタベ」今年も開催（漫画）　オノ ミユキ……45
ゆったりと、りらっくす…アンケート　……47

表紙写真
辻 技 耕司
くつき麻生里山センターゆりのき広場山のコースにて。まっさらな世界がひろがる。

守山なぎさ公園の菜の花と比良山

滋賀の空にトキが舞う?!　松田 千春・芝田 理子……49
環人会ツアーVol.10 東北部浄化センター見学　……51
MOH－ECOTOURISM13 塩の道　檀上 俊雄……54
日本の精神 「自分づくりに挑戦しよう」その三　井上 昌幸……57
〈商家の家訓の話 第11回〉 初代塚本定右衛門の道歌　末永 國紀……59
「旅の楽しみ方」(漫画)　オノ ミユキ……61
心温まる物語 「生きてる 生きてる」　今関 信子……63
愛する風景 「愛着」　畑 裕子……65
MOHせんりゅう2009 ベスト3決定　……67
講演日記　……69
里のお話 「白無垢の伊吹」　三山 元暎……71
本の紹介　……72
通信概要　……73
読者の声　……74

「M·O·H」のマーク＝牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします。

★M·O·H通信の役割★

持続可能で豊かな循環型社会を築く社会人の意識を向上するためMOH通信は情報を発信し交流を続けます

M →もったいない　**循環**　他の生命を奪って得たものを使わせて頂く

O →おかげさま　**共生**　人は一人では生きられない、環境によって生かされている

H →ほどほどに　**抑制**　欲はほどほどに、良き環境を作り上げるために

買い物 ―「社会参画」

「お客様だけが神様ではない」

森　建司

ひと昔前「お客様は神様です」の口上で人気を博した歌手がいた。この口上が高度成長時代の消費奨励の幕開けに相応しい名句として消費者の心を掴んだのだ。

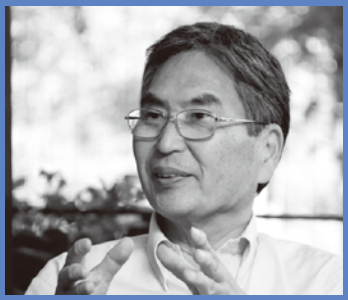
経済は売り手と買い手があって成立する。言葉を代えて言うとお客さま有っての企業である。だからお客様の前に膝まずき、こともあろうに神様とまで崇め奉ったわけだろうが、今となってはこの言葉こそ、それ以後の経済社会で消費者と供給者の間に大きな壁を作ったきっかけになったような気がする。

供給者にとってお客様が神様であるのなら、必要なものを提供してくれる供給者も消費者にとっては神様のはずだ。いや、それ無しには生きていけない消費者にとっては、それ以上の有り難い存在かも知れない。

現代の供給過剰の経済社会では、消費者は権力者として供給側に一方的に低価格を要求し続けている。それに耐えられない企業は敗退せざるを得ない。結果として、自身の家族が働いている中小企業も、その経済のサイクルから叩き出されてしまうのだ。

近江商人の「三方よし」でいう「売り手（店）よし、買い手（客）よし、世間よし」とは、この三方が一つの土俵で一体となって、「商い」を成り立たせること。売り手（店）は買い手（客）のことを真正面から思い、客は店の思いに応えてその商品を大切に扱う、と同時にその店が末永く繁盛するよう、口こみや常連客となって協力、支援していく。そこで供給される商品は、世間に良いものとして引き継がれていく、という願いが近江商人たちの家訓として遺ってきたものであろう。

繰り返して言いたい。「商いはお客様だけが神様では成り立たない」



●対談　今森 光彦　vs　内藤 正明

写真家

NPO循環共生社会システム研究所
代表理事

〈 買い物「社会参画」― ① 〉

『感じる力』を育む世界へ

MOH通信が敬愛するお二人のドリーム対談をお届けします。今森さんの写真からストレートに伝わってくる命のあたたかさや力強さ。命あふれるこの世界を、感じて愛して守る力を育むために、私たちも感性と理性のアンテナを高くしませんか。

●進行／本誌編集長　辻村琴美

■大津市 今森光彦さんのアトリエにて
■2009年9月

オリジナルのコーヒーカップ

昆虫少年で工作少年

辻村　今森さんは典型的な昆虫少年だったとお聞きしますが、そこからどんな風に写真へと発展していったのですか？

今森　僕の場合は生き物が好きで絵も好き、それが自分の中で融合していました。切り絵もそうですね。

内藤　うちの孫も生き物が大好きで、やはり、切り絵のような工作に夢中なんですよ。

今森　切り絵は小学1年生から5年生ぐらいまで、写真より先に夢中になったいわば僕の源流です。生き物って生態的、科学的な面白さもありますが、形としても綺麗でしょ。それが自分の美意識にかなって、追求するところから始まったわけです。それと、子どもながら自分の手のひらの上に、命を宿らせたいという思いがあったのでしょうね。

内藤　ご家族のどなたかから影響を受けたということはあるのですか？

今森　いえ、父も母も生き物はあまり好きではなくて、今につながるような影響は、まったく何も受けていないと思います。なのに、なぜだかわからないけれど、僕は3歳の頃にはもう昆虫好きだったそうです（笑）。唯一、博物館によく連れて行ってもらったことは覚えていて、それには感謝しています。

内藤　それはきっと、一度目に連れて行ったときの反応が良かったからですよ。親というのは、そういうものです。

辻村　お父さまは、どういった方だったのですか？

今森　大阪の会社に勤めるサラリーマンで、朝7時には大津から電車に乗って通っていました。住んでいた尾花川の辺りは軒並み農家なんですが、うちだけがサラリーマン家庭。それに親父は長野県の出身ですから、朝ご飯に納豆を食べるんです。近所にそんな人、いませんよ（笑）。いつもネクタイをキチッとしめて、休みも少ない。友だちの家は雨が降ったら、お父さんが家にいる。それが羨ましくて、サラリーマンにだけはなりたくないと思っていました。だから、農家への憧れを抱くようになったのかもしれません。

辻村　お話を聞いていると、いろいろなものが今森さんのスタイルに影響を与えているのですね。

今森　僕はジャンルとしては、ネイチャーフォトと呼ばれる中にいるのですが、写真の（構図の）中に、なぜ人間を入れてはいけないのか、そういうことを最初から言い続けてきました。自然科学、人間、というように切り離すのではなく、絶えず人が関わっている中に、生き物も関わっている。そこに興味があるんです。これは子どもの頃からできあがっているスタイルですね。

内藤　環境問題そのものですね。自然だけを見て、自分は環境の研究をしているという人がいますが、それは環境とは言わないのです。人と周辺の関わりが環境なのであってね。今森さんの場合も、自然のすぐこちら側に人がいて、その関わりを追っておられるんですね。

辻村　人間味のある自然ですよね。そして、そこに今森さんの美意識が加味されているからこそ、これほどまでに伝わるものがあるのだと思います。

感性とその源流

内藤　その美意識や感性がどのように養われたのか、非常に興味がありますね。

今森　子どもの頃、川へ魚をとりに行けば、河口には漁師さんの船があって、シジミを採っている人なんかもいました。トンボをとりに行った神社の裏のお堀では、ヨシを刈っている人がいて、もちろん神主さんもいて、どこも人がいるんです。そういう人の営みの中と、トンボやセミや魚の存在が、僕には切り離せないんです。僕が住んでいたのは、半分は町化していて、そのはずれでしたから、町化が壊れかけたようなところでした。そういう環境で、僕は自分が好きなもの、見たいものを探していたのだと思います。だから逆に、僕には原生の自然というのがイメージできないんです。ブナの原生林の中で、熊に遭遇するようなことは、僕にとっては現実ではないですね。

辻村　海外ではそうした場所に行かれることが多いのではありませんか？

今森　それがそうじゃないんです。ブラジルのアマゾンに行ったときも、同行した西洋の人たちは「ヴァージンフォレスト」だと言うのですが、しかし、現地にはインディオ（原住民）がいるんです。なのに、なぜこれがヴァージンフォレストなのか不思議に思ったのですが、西洋の人たちは無視を決め込んでいて、インディオを人ではなく、自然の一部ぐらいに思っているんです。密度でいえば限りなく粗な状態ですが、彼らは木も切っているし、れっきとした人が関与している森です。あの（西洋人の）感覚は不思議ですし、ひどい。

内藤　しかし、東洋の考え方でいけば、我々は自然の一部ですから、無視してもらって、いや結構ですと、そうも言いたくなりませんか（笑）。

今森　それは面白い。そういうことを言った人は初めてです（笑）。開き直りじゃないけれども、東洋人としては、そういう発想でいたいですね。

内藤　西洋の人は、人間は神によってつくられた特別な存在で、他の生き物とはまったく違うという考え方です。もともと宗教がありますからね。「食べてすぐに寝たら、牛になるで」という我々とは、そこが大きく違うのですよ。

作品の向こう側

辻村　今森ファンは全国に大勢おられますが、関西と同じくらい、むしろそれ以上に関東での人気が高くありませんか？

今森　そうですね。それが僕の特徴でもあるんです。

内藤　作品を見て感動するのに、距離は関係ないですからね。

今森　僕の作品は単純なんです。そして、大人をベースに考えてはいません。たとえ難しそうなテーマの写真集でも、僕の場合は子どもが主体です。ですから、本作りの段階でデザイナーとも、お母さんがちょっと手伝って、子どもに読んでくれたらいいね、とそういう

「子どもが主体」今森氏（左）、「大人にも訴えかける」内藤氏（右）

話ばかりしています。

辻村　マニア向けではないんですね。

今森　僕は、作品の向こうに子どもがいて、その子が核になって、お父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんへと広がっていくような世界をイメージしています。そういう世界が好きなんです。同世代のカメラマンは、皆、大人をターゲットにしていますが、僕の場合は子どもです。いわゆるマニアや通を意識したこともありません。そのスタンスはプロカメラマンとしてデビューして以来、一度も崩したことはないですね。

内藤　だからこそ、大人にも別の視点で訴えてくる何かがあるんだと思います。

今森　子どもを意識して作ると、逆に（内容の）レベルが落とせなくて、おっしゃっていただいたように、大人も見られるものができるのかな、と思います。

内藤　近づきやすいんだけれども、感じるものがいっぱいある。子どもの感受性のように柔らかだけれど、鋭いんです。

絵本を読むような一皿

辻村　今森さんは、子どもたちに伝えるものとして、食の文化にも関心がおありだそうですね。

今森　ええ。たとえば一皿の料理に、一冊の絵本を読むような物語性が込められている。そんなプレートを作っていただきたいと、琵琶湖ホテルさんに提案しています。もしも雑木林で育ったシイタケを食べたら、自分はどういう自然のシステムに参加したのか。どんな森があって、どんな人がいて、そのシイタケは育ったのか。それがわからないと、自然のシステムなんて考えられませんから。説明をしてあげながら、それがわかるような子どもを育てようというのが思いです。

辻村　自然を考える入り口としては最高ですね。

今森　たとえば鹿肉の料理だったら、朽木村にハンターのおじいさんがいて、村では獣害という問題があってと、とても濃い物語が込められているでしょ。スーパーで買ってきたお肉とは全然違います。そういう一皿って、物凄く価値があると思うんです。

内藤　食べることが環境学習につながるわけですね。

今森　そうです。環境の価値みたいなものを、付加価値にして、それが“食べる”という行為に結びつけばいいと思うんです。できればそういうレストランを開きたいぐらいです。

内藤　いいですね。滋賀県は新しい住人にしても観光客にしても、他府県からのわりと都会の人たちが多いでしょ。そういう層にも、とても受けると思いますね。

「生物の多様性を守る行動を」（内藤氏）

今森　僕には割と具体的なイメージがあって、今みんなが食べているお米、このお米を作っているこの地域では、こういう植生が守られていますと、子どもにも大人にもわかることをやりたいんです。よく、農家の人の顔写真が紹介してあるでしょ。僕は、まだその先にあるものを伝えたい。食べることで、自分はこういう環境に参画するんだと、そういう意識の芽生えですよね。

内藤　例えば、私も「コウノトリ米」（※兵庫県の但馬地域で「コウノトリ育む農法」で栽培されたお米）などは、凄くいいと思うんです。あのお米は、生態系の頂点にコウノトリがいて、その生態系すべてが守られていますという保証になっていますから。

今森　僕も去年、豊岡市を訪れて、現地の農家を取材しました。そしたら、かなりの人が自分の家の田んぼにコウノトリがやって来ることを誇りに思っておられて。これには少し驚きました。

プロジェクトとして、農家の人のテンションを、よくそこまで上げたと思います。

辻村　例えばアキアカネ（トンボ）でもいいですよね。自分の田んぼには、これだけのアキアカネが飛んでいる。それは、おいしいを超えた田んぼの価値ですよ。

今森　そうなんです。これからの時代、僕はそうした取り組みが非常に価値あるものになると思うんです。そして、滋賀県にはその下地が、すでにできあがっていると思います。

内藤　私も一つ関心を寄せているのですが、滋賀県の経済同友会さんの取り組みで、一つの企業が、滋賀の一つの生き物の里親になると。つまり保護活動のスポンサーですね。詳しいことはこれからお聞きするつもりなのですが。

今森　なるほど。それは面白そうですね。

内藤　非常に時代を反映していると思います。企業が生物の多様性を配慮しなければ、結果としてこの先、ビジネスに危機をもたらすようなことが無数に起こるでしょうし、現実に起き出しているんです。

今森　ああ、避けて通れない過程でもあるわけですね。

内藤　例えば、輸入木材を使って家を建てたら、それがカリマンタンで違法伐採された木だったと。そうなると企業としては取り返しのつかないダメージなわけです。きちんと認証を受けたものでなければ使えない、そういう時代になって来たんです。

映像の中のヒューマニズム

内藤　うちのNPO循環共生社会システム研究所では、『里山』の映像を繰り返し見ながら、我々が理屈で言っていることを感性に訴えたら、こういうことなんだろうね、と話し合っています。やはり感性に訴えかけるものは強いと思います。理論や理屈で伝えられることには限界があるのですよ。

辻村　あの（映画「里山」）映像は日本という枠を超えていますしね。

今森　そうですね。あれは文句なしに映像でしたから、言葉を超えるんです。字幕を読んでいる人は少ないんじゃないですかね。第一作の『映像詩　里山～覚えていますか　ふるさとの風景～』は世界98カ国で放送されました。放送されていない国を数えたほうが早いんですよ。それで、NHK側が気に入って、第二弾、第三弾をつくることになったんです。一作につき、およそ2年間をかけて撮影するのですが、そんな番組は滅多になくて、最高でも4ヶ月だそうです。

辻村　サトヤマが世界の共通語になるのは近いですね。

「食べること、映像を見ることも環境学習」（今森氏）

今森宅の雑木林で語らう

今森　里山について、学術的なこと云々は後にして、先に映像が世界に飛んだいい例だと思います。国際版（英語版）のナレーションは、BBC（イギリス）の元プロデューサーで、現在も世界各地で野生生物などのドキュメンタリーを手がけるデイビッド・アッテンボローが、ぜひにと即答してくれました。彼はこれまでBBCの番組しかナレーターを引き受けない人だったので、それも画期的なことだったと思います。

内藤　これまでBBCの番組を買う側が、反対の立場になったのですものね。

今森　第二作の『映像詩 里山～命めぐる水辺～』は、針江の漁師、田中三五郎さんの姿を追いました。テレビ番組の国際コンクール「イタリア賞」で部門最優秀賞を受賞しましたが、世界で最も歴史と権威ある賞だそうで、プロデューサーは逆立ちして喜んでいました。これはもう、僕の力は関係ないんじゃないかなと思います。授賞式には番組の制作にまったく関与していない上の人が出席したのですが、受賞理由をよく聞いてきてほしいと、それだけお願いしました。

辻村　それで理由は？

今森　ひと言でいえばヒューマニズムです。東洋的な発想で人と自然の共存空間を捉えた。それだけですけれど、作り手としてはよく見ているなぁと思います。

辻村　ただの映像美とは思ってない。本質的なところをキチンと理解しているんですね。

今森　西洋が東洋に負けを認めたというと変かもしれませんが、東洋的な共存というスタイルが、これからの自然環境の保護に役立つと、ようやく気づいたのだと思います。

内藤　映像が綺麗というだけだったら、他にいくらでも撮影できますからね。

今森　三五郎さんが生簀の水をすくって飲む場面があるのですが、同じ生簀に琵琶湖で捕まえた魚も泳いでいて、それに外国の人は驚くみたいですね。そういうことを彼らは置き去りにして、忘れてきたわけですから。

①

②

③

④

①新旭針江で出会った川漁師の田中三五郎さん。その暮らしを追ったドキュメンタリー絵本。里山をめぐる水と生命の物語。
②こどもの時から作ってきた切り紙。昆虫を観察してきた今森さんの立体的な造形にびっくり。人気の虫たちが大集合！！
③わき水の里から琵琶湖へ。地下水が湧き、水路を豊かな水が流れる針江地区。琵琶湖水系の自然と暮らしを紹介。
④バリの棚田に感激して帰った今森さんが地元大津で出会い撮影に通ううちアトリエまで建ててしまった仰木の里。美しく、なつかしい、琵琶湖をのぞむ棚田の四季と生命を写し取った入魂の写真集。

内藤　なるほど。まさに、今だからこそですね。ひと昔前なら、人間の力、科学技術の力ありきで、共存なんて何を言っているのか、となるでしょう。しかし、頼りにしていた力が、今の時代はグラグラですから。そういうときに、あの映像を見せられて、ああ、これだったのかと一筋の光を見る思いがしたのだと思います。

今森　そう、世界が迷っているときに、自然と共存することが、提言のように受け取られたんだろうと思います。

辻村　もっと続けたいのですが、本日はこのあたりで。どうもありがとうございました。

アトリエにて、右は今森作「きりえ」

自然とともに生きる 今森光彦

●いまもりみつひこ＝1954年滋賀県大津市生まれ。独学で写真技術を学び、1980年よりフリーランスとして活動。大津市仰木のアトリエを拠点に、琵琶湖のまわりの自然と人の関わりをテーマに撮影を行う。また、世界の辺境地を旅しながらの撮影取材や、最近では切り紙の講師としてNHKの番組にも出演。1995年「木村伊兵衛写真賞」、2009年「土門拳賞」を受賞。著書に『昆虫4億年の旅』（新潮社）、『今森光彦ネイチャーフォト・ギャラリー』（偕成社）、『萌木の国』（世界文化社）などの多数の写真集ほか、『切り紙昆虫館』（童心社）、『今森光彦のたのしい切り紙』（山と渓谷社）などがある。

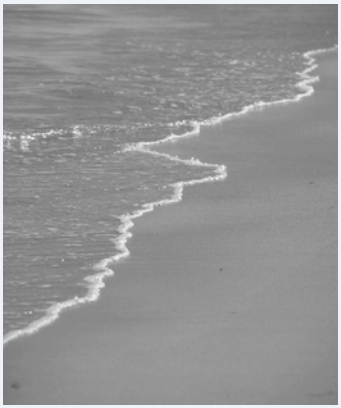
●ホームページ＝今森光彦ワールド
http://www.imamori-world.jp/
☆NHKスペシャル『映像詩 里山』三部作が映画になりました。劇場情報はホームページでご確認ください。
●映画『里山』公式ホームページ
http://satoyama.gaga.ne.jp/

無一物中無尽蔵
有花有月有楼台
内藤正明

●ないとう まさあき＝1939年大阪府生まれ。1962年京都大学工学部卒業、1969年同工学博士、1974年　国立環境研究所主任研究官、1990年同統括研究部長、1995年京都大学工学研究科教授、2002年同大学院地球環境学堂長。
現職／佛教大学社会学部教授、琵琶湖環境科学研究センター長、京都大学名誉教授、（NPO）循環共生社会システム研究所・代表理事、（NPO）KES環境機構・代表理事、他。
著書／『持続可能な社会システム』、『地球環境と科学技術』岩波講座 など。
活動／持続可能社会の理念と実現方法に向けた研究およびその実践活動。

ふれあい
第16回
『 海辺詩人 』

中井 二三雄



お兄ちゃんと海辺の町にやってきました。子どもだけの旅。「どうしても会いたい人がいるから」とお兄ちゃんが言うからです。

6年ぶりの海辺の町。浜にいる人々はみんな忙しそう。とれたての昆布や魚を運んだり並べたり、そして売ったりとにぎわっています。

お兄ちゃんは言いました。「この木の箱を作ったおじさんに会いたいんだ。ここにある言葉が、いつも僕を励ましてくれたんだ」

握りこぶしくらいのきれいな三角形の木箱。昔、家族旅行に来たときお父さんが買ってくれたものです。風鈴のようでもあり、アクセサリーにも見えます。箱には「キラキラ光る」と書いてあります。

「いないなあ」。お兄ちゃんがあきらめかけた時、海のほうから一人の男の人がやってきました。その人は、三角形の箱をしげしげと見つめました。「まだ、持っていてくれたのかい」。おじさんはお兄ちゃんと箱にほおずりしました。

お兄ちゃんが大喜びしたことは言うまでもありません。

●なかい ふみお＝1949年、滋賀県生まれ。著述業。2000年より『湖国と文化』編集長。元シナリオ作家協会理事（月刊『シナリオ』監修委員長）。

訃報

『湖国と文化』編集長・中井二三雄さんが12月5日肝臓がんで亡くなった。享年60才。小誌連載の「ふれあい」は読者の共感を得たショートストーリー。本誌67ページの「せんりゅう2009・評」は、病床での絶筆となった。中井さんの愛すべきお人柄を偲び、ご逝去を悼み心からご冥福をお祈りする。（編集局）

M・O・H レポート1
〈買い物「社会参画」―②〉

『地球を守る』――パタゴニアという会社

篠 健司(右)
パタゴニア 日本支社　環境担当
柿原 貴行(左)
パタゴニア 日本支社　マーケティング部広報担当

百年後も存在する企業であるために

　トレーサビリティ、エコロジカル・フットプリント、次々に新しい用語が生まれる一方、企業が環境のために何をしているのか、私たち消費者にとって、その実態はつかめないような気がします。今回はアメリカを代表するグリーンカンパニー、パタゴニアの日本支社に伺い、製品と会社と消費者と環境の、正しい在り方を考えてみたいと思います。

■2009年9月
■神奈川県鎌倉市／パタゴニア 日本支社

パタゴニアの最高峰・フィッツロイ山の稜線を描いた商標マーク

パタゴニアのはじまり

パタゴニアは、十代の頃から筋金入りのサーファーにしてクライマー、自然の落とし子のような創業者イヴォン・シュイナード氏が、自分自身や個人的なクライミング仲間のためのクライミング道具を作るために我流で始めた鍛冶屋仕事をルーツとする会社だ。シュイナード・イクイップメント社として、1970年にはアメリカ国内最大手のクライミング道具会社に成長した。

60年代末にクライミング装備の延長として衣料品の販売を開始する。そして1970年、イヴォン氏がスコットランドへクライミング遠征した際、あるチームの公式ラグビー・シャツに目をとめた。クライミングにも向いていると考え、それをアメリカに持ち帰ると、クライミング仲間のあいだで評判となり、イングランドから輸入販売したところ飛ぶように売れ、衣料品はほとんど儲けのなかった道具事業を支えるビジネスへとなっていった。

その後、衣料品のアイテム数が順調に増えるにつれ、何かブランド名が必要となったが、シュイナードの名前は、すでにクライミング道具の代名詞であり、そのイメージを弱めず、かつ山登り用というイメージに縛られないために、1969年に遠征登山した南米の秘境『パタゴニア』の名がつけられた。

嵐の大地、氷河の国、様々に形容されるパタゴニアのような厳しい環境にも適したウエアを作ることが、自分たちの目的であるという信念を込めた。そして、1973年にパタゴニアの最高峰・フィッツロイ山の稜線を描いた、あの商標マークが考案された。

日本支社の店頭

パタゴニア日本支社のオフィス内部です。昼間は室内灯を消しています。階段照明は常灯から〝点灯（人が通るときだけ点灯）〟に交換。大きい〜小さいまで真剣に取組みます。

会社の存在意義

日本でも根強いファンに支持されるパタゴニア。現在、国内には15の直営店と、全都道府県にネット・ショッピング、カタログ販売も手がけ、これら3つの販売チャネルを統括するのが、鎌倉にあるパタゴニア日本支社だ。同社はカリフォルニア・ベンチュラにあるパタゴニア本社が、100%出資する支社である（※日本以外にヨーロッパ市場を担当する支社をフランスに置く）。環境担当の篠健司さんとマーケティング部広報担当の柿原貴行さんから、いろいろとお話を伺った。

まず、日本でのビジネスを本社直轄の支社に担当させているのは、何か特別な理由があるのだろうか。

柿原　「特別というわけではありませんが、日本のお客様の製品のクオリティに対するニーズというのは、非常に高いものがあります。おそらくアメリカのお客様以上です。日本で支持される品質を保つということは、世界のマーケットに通じるということですから、私たちにとって一つの目安になります」

また、理由には当てはまらないかもしれないが、イヴォン氏は〝禅〟の教えに精通した人物でもある。

篠　「非常に東洋的なものの考え方をする人です。たとえば〝禅アーチェリー〟、弓道についてよく話すのですが、『一つ一つの動きを100%正確に行ったとき、初めて的を射ることができる。最初に的を見たら、あとは正しいプロセスに集中する。ビジネスも同じで、正しいプロセスを確実に踏んでいけば、利益はおのずと出てくる』そういう考え方です」

では、パタゴニアの的とは？　それはパタゴニアのミッション・ステートメント、つまり存在意義として次のような文言で表される。

『最高の製品を作り、環境に与える不必要な悪影響を最小限に抑える。そして、ビジネスを手段として環境危機に警鐘を鳴らし、解決に向けて実行する』

この文言が生まれた背景には、1991年に同社が経営危機に陥り、やむなく120名の従業員（※当時の全社員の20％相当）を解雇した苦い経験がある。この年のワールドウォッチ研究所の『地球白書』を、イヴォン氏は自著『社員をサーフィンに行かせよう』の中で取り上げ、自分たちの会社の危機と照らし合わせる。

――「いまや世界経済の年生産高は20兆ドルに達し、1900年の年生産高をわずか17日で達成している。すでに経済活動はおびただしい数の局地的、地域的、世界的な限界を超えた。その結果、砂漠は広がり、湖や森は酸性化し、温室効果ガスが蓄積された。成長がこれまでの数十年と同じ路線をたどるなら、遅かれ早かれ、世界体系は重圧に耐えかねて崩壊するだろう」

私たちの会社も、資源や能力の限界を超えてしまっていた。世界経済と同じく、持続不可能な成長に頼っていたのだ。――

ここからパタゴニアは精神的な原点回帰を図り、百年先まで続くような、「より視点の定まった分別のある」会社に生まれ変わる。

環境問題への気づきと行動

パタゴニアの環境問題への気づきは早く、70年代、シュイナード・イクイップメント社の主力製品であったピトン（※クライミングで岩壁に打ち込むクサビのこと。ハーケンともいう）が原因で、岩の形が激しく変容していることに気づくと、ピトンの製造から手を引いた。替わりにチョックという従来品に目をむけ、その品質を向上させて「クリーンクライミング」を提唱し、見事に製品とともに環境に負荷のないクライミング技術を普及させた。

80年代になると、イヴォン氏はクライミングやサーフィンで訪れた馴染みの場所が、数年前とは明らかに変貌していることを目の当たりにし、自然の荒廃に悩まされるようになる。そして、こうした外の情報を社内に持ち帰り、問題を共有化することで、自分たちの製品や会社としての行動に反映させていったのだ。

「企業にとって、地球が株主である」。これもイヴォン氏の有名な言葉だ。

パタゴニアのエコシステム

イヴォン氏の著書に、こんな一節がある。

――私が思うに、パタゴニアは一種の生態系（エコシステム）であり、業者や顧客はその欠かせない構成要素である。――

レジ前、レジ袋削減などのメッセージ

カラフルなウェアで彩られる店内

リサイクルボックス

パタゴニアは、アメリカで初めて、製品カタログに再生紙を使用（１９８４～）した会社だ。飲料ペットボトルを再生した素材で、フリースを作った（１９９３～）初めての会社でもあり、農薬や殺虫剤の問題から、使用するすべてのコットン素材をオーガニックコットンに切り替えた（１９９６～）会社でもある。

カタログで紹介される製品のほとんどに付けられたｅのマークと糸のマーク。前者はオーガニックコットンやリサイクルポリエステルなど、環境に配慮した素材を使った製品に付けられる。後者は、パタゴニアが２００５年に発足させた「つなげる糸リサイクルプログラム」のロゴマークで、フリースやコットン

Tシャツ、キャプリーンという素材のアンダーウェア、さらに他社製のポーラテック・フリースなど、着古した後、洗濯して直営店にある回収箱に入れるか、指定のあて先に送付すると、リサイクルされ、また新たな製品へと生まれ変わる。

売上げの1%を寄付する同盟

カタログの最後に必ず記載された1%のマーク。これがイヴォン氏が2001年に共同設立した企業同盟「1%フォー・ザ・プラネット」のロゴマークだ。自然環境の保護および回復を精力的に推進する人々に対し、少なくとも毎年売上げの1%を寄付すると、各々の企業が誓約し、これを守る。もっともパタゴニアは、こうした寄付活動を「地球税」として1985年から続けており、会社の業績に関わらずこれまで継続してきた。

柿原「イヴォン自身、実際に変貌してしまった現場を見たことの責任が、その現場で活動する人たちのサポートへとつながっています」

"その現場"で、特定の問題に取り組む人たちを支援するために、草の根的な運動を展開する小規模なグループを寄付の対象にしているのが特徴だ。

会社が地球に残す足跡

さて、MOHが注目したのは、「フットプリント・クロニクル」という試みだ。パタゴニアの製品がデザインから納品に至るまで、どのように地球に足跡を残しているのか、現在17の製品について、WEB上で追跡することができる。

たとえば、定番のシンチラ・ベスト。材料を供給する工場など、足跡は北米に集中している。エネルギー消費量、移動距離、二酸化炭素排出量、廃棄物の数値とともに、良い点と悪い点の自社評価も掲載されている。悪い点なら、"この製品のサプライチェーンではおもにトラック輸送が使われるため、海を越えて船で北米まで輸送されてくる製品よりも二酸化炭素排気量が上回る場合があります"というように。

鎌倉店スタッフ一押しの「DASパーカ」。保温性は従来どおりで30%小さくなりました。グレーの袋に収納できコンパクトに。

篠「自分たちの会社は、環境への負荷を排出しているという認識に立った上で、どれぐらいの影響を与えているのか、それを理解することを目的としています。と同時に、製品が出来上がるまでのどの過程で、どのような影響を及ぼすのか、どういった配慮が考えられるか、お客様に会社を知っていただくための取り組みでもあります」

パタゴニアという一つの会社を知ることは、他の会社を見る目を養うことにもつながる。いま、日本ではカーボン・オフセットの取り組みが花盛りだ。それ自体は悪くないが、相殺でチャラになるという発想や、カーボン・オフセット以外のアイデアが活発に議論されない点に、問題を感じる人も多いのではないだろうか。また、影響という点では、二酸化炭素だけで済まされる話でもない。

篠「それぞれの場所で人が関わっています。特にアパレル産業では、労働搾取の問題が取り沙汰されてきましたが、フットプリント・クロニクルでは、パタゴニアのすべての工場リストとともに、現地の労働に対する社会監査等についても公開しています。他の会社にも環境へのアクションを起こしてもらうために、非常に透明性の高い内容にしているつもりです」

パタゴニアは環境保護と経済活動の両立が図れることを、自分たちの会社をモデルにして証明しようとしているのだ。

世界は変わる

MOHが今号のテーマとした『買い物は、社会参画』だが、私たちの買うものすべてがパタゴニアのような製品ではないし、星の数ほどある会社がすべてパタゴニアのような会社でもない。

しかしながら、篠さんと柿原さんからお聞きしたところによると、アメリカでは、環境を重視した企業経営がビジネス社会の大きな潮流になろうとしている。あの、世界最大の小売業ウォルマートが、世界共通（※全世界で店舗数は7千店近くにのぼる）の環境格付けを開発し、どれだけ環境にやさしい商品か、ラベルを見ればひと目で確認できるようにするそうだ。ウォルマートの取引先は10万社を超えるが、そのすべてに対し、〈エネルギーと気候／材料効率性／天然資源／人と地域社会〉の4分野について順次、アンケートを行い、その回答をもとに格付けが行われるという。

イヴォン氏のルーツ、登山用品とカメラ、そしてウェア

篠「それに先立って昨年10月に、イヴォンがウォルマート社に招かれ、同社の約1200人のバイヤーに“グリーンカンパニーとは何か”をテーマに講演を行いました」

談笑するスタッフ。制服はない、マイスタイル。

イヴォン氏のような人物に、グリーン化の指南役を依頼すること自体、ウォルマート社の本気度がうかがえる。世界は確実に変わろうとしている。

篠「今後ますます、人口増加や資源の枯渇が進むと予測されます。その中でビジネスを継続するには、やはり”持続可能性“ということにしか答えはないであろう、それには消費者が関与していかなくてはならないと、企業が気づきだしたのでしょう」

もちろんそれでも、価格や利便性が購入基準の一番に居座るのかもしれない。でも、選択するチャンスを与えられるのと、与えられないのとでは、まるで話が違う。今後、本当に深刻な危機が訪れたとき、私たち（消費者）は知らなかったと、怒りわめくようなシナリオは一つ消えるのだ。あとは、知っていたけれど変われなかった、もしくは、知っていたから変われた、のどちらかだ。私たちの買い物スタイルが、大きな分かれ道に立っている。

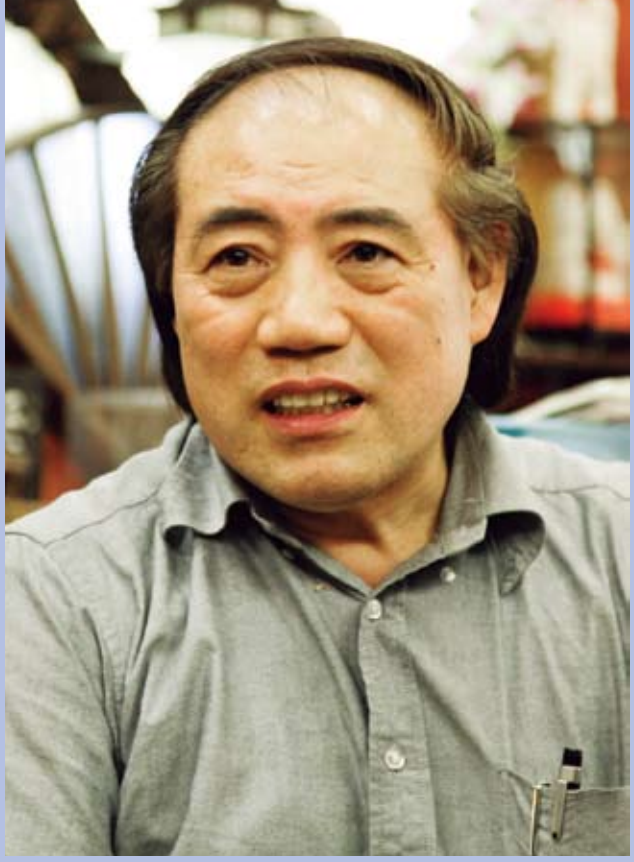
篠 健司

●しの けんじ＝1988年、米アウトドア衣料品メーカー、パタゴニアの日本支社に入社し、広報、直営店舗マネージャーを担当。1999年同社を退社し、外資系アウトドア企業で2年間勤務した後、パタゴニア日本支社に再入社。物流部門マネージャー等を経て、現在、環境担当。コンサベーション・アライアンス・ジャパン理事。

●パタゴニア日本支社＝
〒248-0006
神奈川県鎌倉市小町1-13-12 本覚寺ビル
http://www.patagonia.com/japan

M・O・H レポート2
〈買い物「社会参画」―③〉

160年の暖簾を受け継ぐ「八百與」の商い



小倉 秀一
長等漬製造本舗「八百與（やおよ）」

無理はせず、楽しく、気は抜かず―

100年後も継続するビジネスとは？　そのヒントを探しに創業160年の老舗「八百與」さんを訪ねました。大切なのは時代に流されず、自分たちの商売を見失わないこと。スロービジネスの原点が、そこにありました。

■大津市 菱屋町商店街
■2009年9月

始まりは八百屋と精進料理から

現在、大津市に三つあるアーケード商店街の一つ、菱屋町商店街で、嘉永3年（1850）の創業から160年の暖簾を受け継ぐのが伝統の逸品、長等漬で知られる八百與だ。

そもそも長等漬の名は、第三代滋賀県知事を務めた中井弘が、「こんなに美味いものを、ただの粕漬けと呼ぶのはいかにももったいない」と、長等山の麓で商いをしていることにちなみ名づけたのだという。

八百與の商標である長等漬の材料は、今では希少な地元の特産品、近江かぶらだ。形は扁平で、独特の歯ざわりがある。この近江かぶらの種を享保年間（1716～）頃に京都市左京区聖護院あたりで栽培したものが、かの聖護院かぶらになった。ちなみに滋賀県はかぶらの栽培に適した土壌が琵琶湖周辺のあちらこちらに広がり、近江かぶらのほかに万木かぶらや兵主かぶらなど、十品種あまりのご当地かぶらがある。

八百與の始まりは、その名からもうかがえるように八百屋だった。それと並行して、精進料理の出張サービスを手がけていたのだという。店に伝わる明治初期の大福帳には、日付とともに出張先のお寺や近隣町の家の名前が正確に記されている。また、押し寿司の寿司型など、当時の調理器具も残され、その型が随分と大きなことに驚かされもする。粕漬けを始めたのはその後のことで、明治10年頃に漬物店として八百與の名が知られるようになった。

季節のおつけもの、いい香り

「今日は何にしよう？」「いつも、おおきにい！」
常連さんが馴れた足どりで店内へ

老舗を記す看板、近江かぶらの商標（左上）
全国から注文の御手紙（中上）　宮内庁ご用達の大福帳（右上）　稀少品の長等漬、柔らかな甘い味わい（右下）

◎大正天皇は胡瓜漬けがお好き？◎

その頃、上流社会のあいだで習慣化していたお歳暮やお中元に、八百與の粕漬けが用いられるようになり、近隣の三井寺や円満院からも贈答用の注文が舞い込むようになった。そうした品々は京都の公家にもつかわされ、名門の九条家をはじめ、複数の公家から直接、注文を受けるようになった。ところで九条家といえば、大正天皇の后、貞明（ていめい）皇后のお里である。明治33年（1900）に御成婚され、その後、宮中で粕漬けの味を懐かしく思い出されたのかもしれない。八百與は大正3年（1914）、宮内省御用達の認定を受けることとなった。当時、宮内省からの注文書はすべて郵送で、ほぼ毎月のように届いた。そのうちの何通かが、大福帳などと一緒に店先のガラスケースに展示されている。差出人の住所が葉山御用邸（神奈川県）と記された封筒もある。

六代目のご主人・小倉秀一さんによると、胡瓜漬けが他より大量に注文されているそうだ。大正天皇は胡瓜漬けが好物だった？などと想像も膨らむ。太平洋戦争を境に注文は途絶えたが、今も店頭に並ぶのは、その頃となんら変わらない技法で漬け込まれた粕漬けや糠漬けだ。

◎160年、承継する力◎

八百與代々の当主は、おそらく初代の技法を、忠実に守り受け継いできた。言葉にすれば簡単だが、同じことを毎日続ける難しさを、私たちは経験を通じて察することができる。その、1年続けることの難しさを掛けることの160回。承継する力こそ、老舗の底力といえるのではないだろうか。

店先に無造作に置かれた漬物石は、今では滅多にお目にかかることのない特大サイズだ。これに釣り合う大きさの樽を製作するところは、県内ではもう見あたらない。年季の入った五つ玉そろばんや、大福帳など、仕事の道具

にも歴史が宿っているのだ。

しかしながら、まったく不変というわけではなく、これまでに秀一さんは、店の業態に変革ももたらしてきた。

「私は24歳の時に家業を継ぎました。その頃、店頭には漬物や佃煮、豆腐や醤油と、いわゆるよろず屋でした。まずそれがダメなんやと思い、漬物に絞るため、たくさんの商品を切っていったんです。若かったから、業者さんやとか横のつながりがなかった。だから、そんなことができたんやなぁと今になって思います」

漬物に特化すればお客さんを限定することになり、その分商圏を広げなければならない。難しい選択だったが、当時は地元に大型店の出店が相次ぎ、何か手を打たずにはいられない状況だったのだ。

「商店街でもよいお店はテナントとして出店しておられました。私はちょうどその動きが一段落した頃に家業を継ぎましたから、出店するところもなかったんです。でも、それが後になってみると良かった。出店もし、借金もしで、一旦売れ行きが悪くなると、賃料に経営を圧迫されて、最終的には商店街にあった店まで閉めなければならないというケースが多かったですから……。商店街にとっては、客足だけでなく、よいお店も奪われてしまったわけで、二重の痛手ですね」

無理をしなかったことが、結果として吉と出た。時代の風向きでマイナスはプラスに変わり、またその逆もある。目先のプラス・マイナスに捉われすぎないこと。そんな商売こそが、スロービジネスの原点なのかもしれない。

◎楽しそうに働く両親の姿◎

秀一さんと奥さんの久代さんは、無理はしないが、自分たちの仕事には厳しくこだわる。だからこそ、長年のご贔屓さんも多い。

「今のお漬物は大半が調味液漬けで、糠漬けのものは少ないんです。でも、液漬けと糠漬けの違いを知っていてくださるお客さんはまだまだおられます。おたくの糠漬けを楽しみに待ってたよ、と言ってもらえると、商売冥利につきますね」

10月下旬から2月にかけて、およそ2トンの赤かぶらを糠漬けにする。これも八百與の人気商品だ。

「その年の気温や、赤かぶらの出来で、毎年、塩加減を変えないといけませんから、ずっとメモを取り続けています。失敗したら次の分の樽が漬かるまで、『切らしてます』と言うしかない。途中で味見ができませんから、難しいですね」

そんな秀一さんの背中を見て大きくなったのが、長男・康寛さんだ。理系の大学を卒業後、大手流通業に就職した。流通業を選んだのは、近い将来、家業を継ぐためだ。小売りの最先端で、実家とは真逆の商売を勉強したいと思ったそうだ。

「いま、青果部門の主任をやらせていただいてます。八百與の商売に取り入れられそうなことは沢山あると思うのですが、僕自身、まだ老舗の商売というのがわかってない。だから、両親と話をして、取り入れるべきかどうか、除々に考えていきたいですね」

この日は遅い夏休み中とあって、店先に家族3人の姿が揃った。小倉家は5人家族で、五代目の祖父与七郎さんと、弟の隆義（たかよし）さん。隆義さんは、自動車の整備士として働いている。兄の康寛さんが家業を継ごうと決めたのは、

「仕事の大変さを見てきましたから、いつか両親を助けたいという思いはありました。でも、一番の理由は、父も母も楽しそうに働いているからです」

と答えてくれた。

◎50回は多い？　少ない？◎

ゆくゆくは野菜作りにも挑戦したいという康寛さん。26歳ながら、若さには甘えていられないと感じるそうだ。

「野菜にも周年野菜と旬野菜があって、特に旬野菜は売り方を間違うと次のチャンスは一年後にしかやってきません。漬物も四季がありますから、漬け方に失敗すると、今度は一年後まで待たないといけないんです。僕が80歳まで現役でいたとしても、チャンスは50回ほどです。それが多いのか少ないのかわかりませんが、50回目で、これぞ完璧という仕事ができても、それではお客様に申し訳ないし、僕自身も納得できないかもしれません」

なるほど、そういう考え方もあるのかと思うが、父の秀一さん、母の久代さんなら、果たしてなんと答えるのだろう。もしかしたら、言葉で答えられるものではないのかもしれない。

さて、七代目に暖簾を託すその日までに、秀一さんには少しでも進めておきたいことがある。人の背丈を遥かに超える特大の漬物樽や、250個以上ある漬物石、そうした道具も含め、〝店をお客様に見せる〟計画を構想中だ。店の奥には二つの蔵や80坪余りの広さの作業場などがあり、ここにも八百與の歴史が息づいている。実現すれば〝現役の漬物ミュージアム〟。

「お客様に品物を買うだけとは違う、お漬物屋さんの空間や時間を楽しんでいただけるような場所が設けられたと思っています」

まずはそのために、使っていない樽や漬物石を、綺麗に水洗いすることから始めたそうだ。夢はじっくりと温め、少しずつ形にしていく。これもスロービジネスならではのスタイルではないだろうか。

漬物石がたくさん

大人も入れる特大樽

六代目当主、小倉秀一氏（左）、おかみの久代氏（中）、七代目康寛氏（右）

創意工夫 小倉秀一

●おぐら ひでいち＝昭和25年（1950年）60年に一度の五黄の寅年、八百與創業100年目に生まれる。19才で東京の佃煮店に修行に出、24才で家業を継ぎ36年。こつこつと信念を持って前進中。

地産地消 小倉康寛

●おぐら やすひろ＝昭和58年（1983年）生まれ。龍谷大学卒業後、大手スーパーに修行のため入社。おばさまから人気が高い。27才には七代目として家業に入る予定。花嫁さん募集中。

●宮内庁御用達 長等漬製造本舗 八百與（やおよ）＝嘉永3年（1850年）八百屋、精進料店を経て漬物店へ。宮内庁御用達をいただき、現在まで160年の歴史を大切に物店を続けている。

〒520-0046
大津市市長等2丁目9-4
TEL・FAX 077-522-4021

MOH通信・買い物アンケート

環境を生活の柱に
あなたの夢を実現させる時

《アンケートの背景》

小誌は2004年3月、循環型社会をめざす環境倫理の啓発誌として発刊した。皆様の暖かいご支援で6年を経過し、26号が発行できた。私たちは『人は環境をつくり　環境が人をつくる　キーワードはMOHもおっ』を合言葉に、取材を重ねた。2005年12月、10号のアンケートで「私たちは循環型社会を必要としているか」についてアンケートを実施。結果は92%が「必要」と答え、「社会の変革を望む」は82%。反面、「具体的に何をすればいいのかわからない」が大半。

アンケートの結果を踏まえ、毎回テーマを設定し多方面の角度から取材を重ねてきた。

13号　2030年自然と共生する滋賀の将来像「命ってなんだろう」2006年8月
14号　「共生」
15号　「危機意識～今、なすべきこと」2007年3月
16号　「滋賀の取組み」
17号　「地域を元気にする秘訣を探る」3周年記念
18号　「九州の行政・企業・市民の環境意識を探る」
19号　「滋賀の明日・地域における役割」2008年3月
20号　「文化が支える日本の心」
21号　「わたしが創る未来の暮らし」
22号　「挑戦、一歩前へ」
23号　「変革、視点を変えれば世界が変わる」2009年3月
24号　「人づくり、温故知新」
25号　「めばえ、環境産業」6周年感謝
26号　「買い物、社会参画」アンケート（本号）

4年を経過した2009年、皆さんの行動がどのように変化したか、アンケートを実施した（2009年6月～12月）。

《アンケート回収率》

半数以上の回収率（60%回収数300枚）。講演の聴講者を対象とし講演会終了後の回収となった。記述式の解答用紙のため、応えにくさが数字に反映したと思われる。

《関心を持っていること》

環境に対する問題意識は、非常に高い。回答者ほぼ全員といってもいいだろう。ただ、数名は、関心が薄いという回答だった。

関心のある内容は、数値の高い順から①温暖化・CO2削減（26％）②省エネ・地球資源（12％）③ゴミ問題・分別（11％）④琵琶湖・水（6％）⑤リサイクル・リユース（3％）⑥森の荒廃・伐採（3％）⑦過剰包装・エコバッグの使用⑧有機農業　⑨不要なものは買わない⑩自然環境の減少　⑪地産地消　⑫食品添加物…と生活の中に疑問を抱えている現状が浮き彫りとなった。

《配慮・実行していること》

では、環境への関心に対する行動はどのようなものがあるのか、数値の高い順に見てみよう。①エコバッグ利用・レジ袋もらわない（54％）②ムダな買い物を避ける（8％）③省エネ（6％）④過剰包装は避ける（5％）⑤地産地消（4％）⑥ゴミ削減　⑦ゴミ分別　⑧歩く　⑨食べ物に気を使う　⑩自作農・自給自足　⑪エコドライブ…と続く。

スーパーでの、エコポイント加点および割り引きが功を奏しているのだろうか、エコバッグの利用とレジ袋を辞退する行動がダントツ（44％）。次いで、ムダな買い物を避けるなどが続くが、いずれも僅差。政府が推奨する、エコ製品の政府エコポイント特典を環境と関連付けている人は少ないようだ。生活全般の自己行動に環境配慮の意識が根付いていることがアンケートの結果から、はっきりとわかった。

《環境倫理は心の中に》

アンケート回答者の対象が、環境問題に対して、興味を持っているという事情を考慮しても、4年前とは大きく変化した。一枚のアンケート用紙に収まらないくらい意見を書いてくれる人、具体的な行動を広めようと努力する人、子どもや孫に伝えることを実行する人、伝統的な生活慣習を残そうと努力する人、…。まさしく、環境倫理は人々に根付いていると言っても過言ではないだろう。

《エコなくらしの感想》

エコなくらしをすることは、「ムダがはぶける」「ゴミが少なくなる」「節約につながる」「健康にいい」「こどもに伝えられる」など、おおむね良好。反面「この活動で地球が救えるのだろうか？」と疑問をもつ層もある。若年層は「かわいいから」とエコグッズのデザイン性に興味を持つ傾向も見られる。高齢層は「もったいない生活は身にしみている」「孫に伝える」「自作の野菜をたべる」という傾向も見られ、高齢層の生き方そのものが、〝エコなくらし〟に近いのだろう。

《襟を正して》

「循環型社会」の実現に向けて、多くの読者（1500名）と、今回アンケートにご協力くださった皆さん、応援いただいている多くの皆さんとともに、新たな取組みをご紹介し、暮らしに役立つ情報誌としての役割の大切さを認識した。

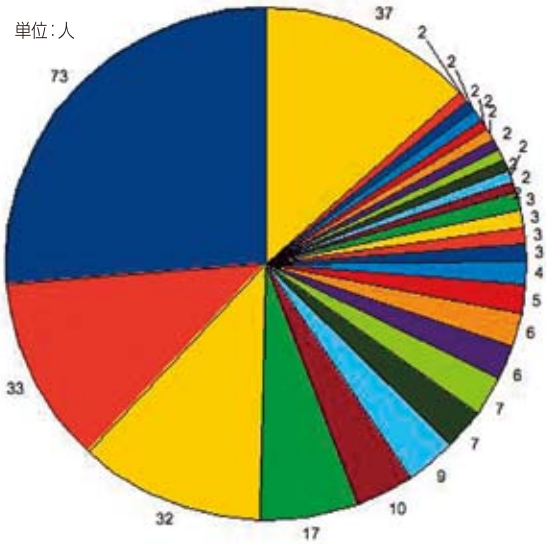
次号（27号）は「再生・地産地消」2010年3月を予定している。

《夢を持ちたい》

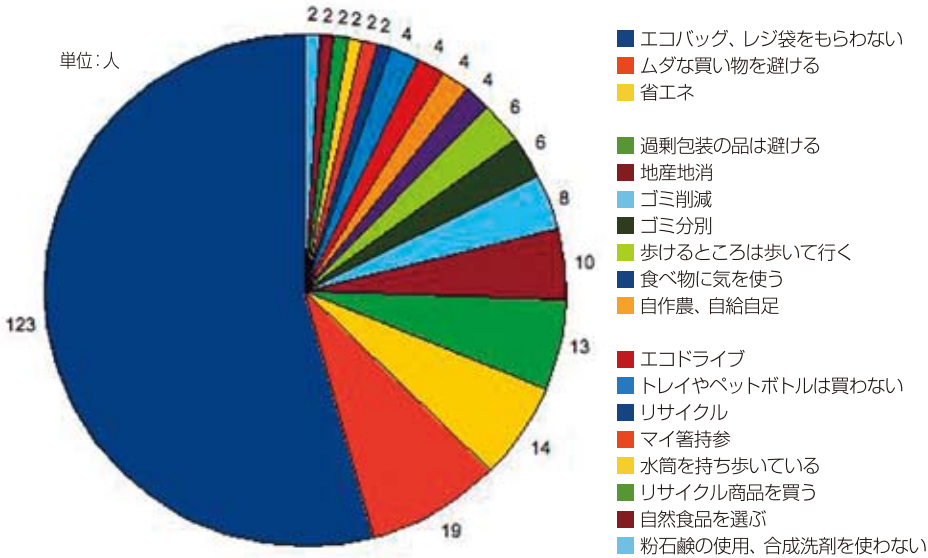
政府や行政の方針が大きく変化するか？現状維持か？縮小か？見えにくい現実ではあるが、私たちのやるべき役割はなんだろう？

しっかりと生活設計を立てることはもちろんだが、若者に期待し、滋賀の手づくり商品が並び、琵琶湖に流通船が走り、表現・発表の場がたくさんあり、地域活性ができる町。そんな、地産地消MOHタウンがつくれれば、いいな（編集長の夢）。あなたの夢を聞かせてほしい。

環境問題に対して関心を持っていることを教えてください。



あなたが環境を配慮して実行（買い物）していることを教えてください。



あんなところにも　こんなところにも
M・O・H　もう　モウ～！

「出張が多くて、楽しかったワ、チョット疲れたケド・・・」

“もうチャン”のグッズと展示パネルが増えました。ご要望があれば、喜んで出張いたします。

“ピンクのもうチャン”（右）と、ペン&カードたてになる“組み立てもうチャン”（左）。

■びわ湖環境ビジネスメッセ2009年
●日時：10月21～23日 ●場所：長浜ドーム　●主催：びわ湖環境ビジネスメッセ実行委員会、滋賀県　●出展：環境配慮型フィルム製品、紙の展示什器、CSR実践（MOH通信）

■移り住むなら滋賀県湖北　田舎暮らしフェスタ
●日時:11月1日　●主催:湖北移住交流支援研究会 ●会場:旧余呉小学校

■滋賀グリーン購入ネットワーク設立10周年　記念シンポジューム
●日時:11月22日 ●主催:滋賀GPN ●会場:ビバシテイ彦根2階ビバシテイホール

■びわ湖・まるエコ・DAY2009
●日時：11月28日～12月6日 ●場所：びわ湖博物館　●主催：びわ湖・まるエコ・DAY実行委員会、滋賀県、湖国まるごとエコ・ミュージアム推進会議、滋賀県立大学

■レディース中央会　全国フォーラムｉｎ滋賀
●日時：10月20日　●場所：大津プリンスホテル　●内容：よしモニュメント　●制作：成安造形大学

■室蘭商工会議所より
ボルタ君（ボルトで作ったポーズ人形）

M・O・H レポート4
〈買い物「社会参画」―⑤〉

手作り市で売る、買う、表現する

浦谷 誠人

NPO法人滋賀ものづくりネット　代表

大量生産、大量消費が大手を振るっている昨今。滋賀県にも「安い、売り場面積が広い」をウリにした全国チェーンのスーパーや外資系スーパーの出店が目立つ。

そんな中、手作りのものを地域の人に買ってもらう昔ながらの経済活動の場を復活させているのが、NPO法人滋賀ものづくりネットです。それは、毎月第2日曜日「栗東芸術文化会館さきら」で開かれる「滋賀がいいもん市」。市では食材から衣類まで様々な商品を作り手自ら、販売しています。「滋賀がいいもん市」ができた経緯を代表の浦谷さんに伺いました。

■栗東市　栗東芸術文化会館 さきら広場にて
■2009年9月

手づくりハーブ石けん

◆「滋賀がいいもん市」へ

9月の第2日曜日、午前10時半過ぎ、栗東駅から栗東芸術文化会館「さきら」へ向かった。その一本道に、どこからともなく人々が集まってきて、群れとなった人の波は「さきら」に吸い込まれていった。

秋晴れの空には白い雲がまばらに漂い、日差しがやわらかい。時折吹き抜ける風にトンボが泳ぐ。会場には約100店舗が軒を並べ、周囲の芝生や石段はピクニックにもってこい。家族連れがお弁当を広げたり、市に出ている串刺しの玉こんにゃくをかじっている。

◆滋賀県で市を出したい

私たちは会場を見渡せる石段に腰かけた。

「なんでこんなことをするようになったのか、自分でもよう分かりません。何や縁があったんでしょうね」

浦谷さんはのんびりとした口調で語り始めた。

1978年守山生まれ、32歳。この夏、一児のパパになった。実家は守山で漁師を営んでいる。

自分のことを「琵琶湖の魚屋」と表現する浦谷さんは、20代前半から京都や名古屋の市で魚を売っていた。その間、「滋賀県で市ができたらなぁ」と思い続けてきた。20代半ばになって、「ないのなら自分で作ろう」と一念発起し、2005年10月第一回「滋賀がいいもん市」を開催した。一回目の出店数は70店、それが現在では120店に増えた。

「正確な来客数は分かりませんが、根付いているのがうれしい」

と浦谷さんは顔をほころばせた。

◆琵琶湖の漁師を取巻く状況

この日の市には、漁師を生業とされている浦谷さんのご両親がカワサギのてんぷらやアユの佃煮を出店されていた。家業を継ぐことは考えなかったのだろうか。

「組合員ではあるんですが、魚が昔ほど獲れないし、捕獲量が生活レベルには至っていない。昔は漁師一本で食えたのが、魚屋になり、魚屋で済んでいたところが販売までしないといけなくなった。そうなって、なおかつまだ生活できないレベルにある。個人で販売するのが厳しい状況でした」。

そこで浦谷さんが様々な地域の市で魚を販売していたのだ。市場で販売するようになって6、7年も経つと出店者同士が仲良くなる。話を聞いてみると滋賀県在住の人が多い。滋賀県には信楽や長浜の硝子など、地場産業があるのに、県内では売らずに大阪や京都など県外に売りに行っている。しだいに、「滋賀県でやりたいよね」と話をするようになった。

初めて「滋賀がいいもん市」を開催するとき手伝ってくれた地元の同級生は、それ以来スタッフとして運営に参加している。月に一度、市で会ってみんなでしゃべるのが同窓会代わりだ。

◆商売的には月に何回も開催したい

目下のところ、「滋賀がいいもん市」は

マンションが多い栗東市

手づくり日用品の数々が

毎月第2日曜日、つまり月に一度のペースで行われている。商売を考えると、もっと回数が増えた方がいいのではないか、そんな疑問をぶつけてみた。

「僕はしたいんですよ」

と即答が返ってきた。

「今、出店している人で、市で食べている人はほとんどいません。多くの人が、たとえば主婦をしながら好きで手作りしておられる。

この人たちが市で手作り商品を販売することがアルバイト感覚でできるようになればいい。毎週滋賀県各地で市があって、自分に合ったところで自分のペースで出店するというのが理想です。だからもっと市を出したいのですが、『やりたい』気持ちだけでは市はできません。いろいろな準備や育っていく時間も必要です。それで慎重に条件を選んでいます」

今年の10月には大津で第一回「プロムナード青山の手づくり市」が行われた。2年ほど前から何度か「手づくり市をやってください」と呼ばれて青山地区で手作り市を行ってきた。地域の方にも認

栗東芸術文化会館では、地域の催しも同時に

女子は、甘いものがおすき

ファミリーの姿が多い、若さと活気がみなぎる場内

めてもらい、青山町作りセンターとも連携できるようになってきた。そこで、月1回、定期的に行うことになったのだ。

◆地域ぐるみの動き

ところで、この日の市は、敬老会のイベントと一緒に開催され、自治会長も挨拶に立った。地域を含めた動きを意識しているのだろうか。

「僕たちはデパートではありません。市場がいろいろな人の発表の場であればいいと思っています」

その言葉どおり、5月にはママさんオーケストラと、10月は保育園、11月は栗東国際交流協会とコラボした。

たとえば国際交流協会の場合は、「地域の人に知らせたいことがあるのだが、どのように知らせたらいいか分からない」と悩んでおられた。そこで浦谷さんの市とタイアップしてイベントをやることにした。集客の面でも相乗効果がある。

「人とのつながりは大事にしたいので、イベントも大事にしています」

と浦谷さん。

こんにゃく玉のおでん

◆昔の市場の匂いがする

手作り市は、作り手が売るので商品を買うときに、製作エピソードなどを聞くことができる。すると商品への愛着が増す。デパートのように、「気に入ったから買いました」だけでは終わらない。

市の中で、ぼーっとしていたら和菓子屋さんのテントから

「ほら、わらびもち買いいや」

とおやじさんに声をかけられた。それがなんだか心地よい。そんな感想を伝えると、浦谷さんは

「最近子どもが生まれたのですが、手作りのものに触れて育つことが将来、息子のためになったらいいなと思います。こういう市に居ると『私、これになりたいわ、あれになりたいわ』と職業イメージがわきやすい。市がそういうものの一つになればいい」と、将来像を語ってくれた。

おばあちゃんがお店を出し、お父さんが市をプロデュースして、孫が居る。三世代がこの市で育っていく。そんな情景が目に浮かんだ。

実は、参加者の年齢層が幅広いのも「滋賀がいいもん市」の特徴だ。

「僕はこういう市場で生まれ育ったから、このスタイルで商売していきたい。だけどデパートだけで買いものしたいという人も居る。そこはライフスタイルなので色々なバリエーションがあるといい。手作り市が好きな人のために選択肢としてこの種の市があるべきです。各地でお客さんの顔を見ながら商売するスタイルがもっと広がっていけばいい」

との浦谷さんの言葉に辻村編集長は、

「市場が元気も体力もなくしている。市場で生まれ育った私は、その中でしつけや教えてもらったことが多い。勘定の仕方や季節の野菜や魚のことを教えてもらいました。スーパーでものを取ってレジで清算するだけの買い物は何かがかけています。ここは、昔の市場の匂いがします」

と大きくうなずいた。

◆お客さんが来るか毎回不安です

スタッフはお客さまの対応

サイフの紐もゆるんでしまいそう

「毎月、ようみんな来てくれるなぁと僕も不思議です。今日もメンバーと『人、来るのかな』と心配していました」

来てくれるのか当日ふたを開けてみないと分からない。だからこそ、広告には力を入れている。

「みなさんからお金を頂いて僕らが運営させてもらっているので、そこをサボるわけにいかない」と、いうだけあって二万部以上は折込みチラシを入れる。県内フリーペーパーなどにも広告を出す。出店料は1ブース3千円。出店者には、「人任せにしないでくださいよ。自分たちで自分たちの市場を守ってください」と言っている。NPO団体だから、無駄な経費は使わないし、何に使ったか会計報告を公開する。

「出店料の分、集客が上がり、利益が出るところまでは僕らががんばらせてもらうし、協力してくださいと言っています。出店者さんが『また来たい』と思われるものにするのが僕らの仕事ですし、そのためにどうしたらいいか考えています」

出店者のリピーターが多いのもこのあたりにヒントがあるのだろう。

毎回これだけ集客があって、4年間継続し定着してきた秘訣はあるのだろうか。と、質問すると浦谷さんは首をかしげた。

「何なのでしょうね。僕は毎回お客さんが来るか不安です。怖いから広告を打つしイベントをする。どんどん新しいことをやります」

◆アイデアは出店者から

たとえば、今年の8月には雨で中止になったが、夜市を行う予定だった。全店に電気配線し、ちょうちんを吊る計画であった。電球やちょうちん、電気配線を引く費用は、出店者に了解を得て、5～7月の広告を半分に減らし経費分を貯めた。

夜市の企画は出店者の声から着想を得た。「夏は暑いけど、お客さんと約束しているから来てるんや」と言う人が多かった。「それならもっと涼しい時間帯にできたらいいですね」と。

毎回、出店者からの声を聞くのが浦谷さんの仕事の一つだ。

子どもたちがかけまわる。自由で安心な遊び場だ

地産地消の商品も

おねだりしたり、えらんだり、視線は商品を追う。テント素材は環境に配慮したもの

店舗を回って写真を撮って、「どうでしたか?」と尋ねる。「ああだった」「こうだった」というのを聞いて、「じゃあ次回はこうしよう」と企画を練る。

◆作家の卵たち

最近は出店者同士のコラボがよくある。手作りの作品を使って別の商品を作るなど合作の動きが出てきている。

「みなが仲良くなり、新しいアイデアが出ているみたいです。僕らは、出店者さんは作家の卵だという意識を持っています。応援してあげて地域に根付いてもらいたい」と、浦谷さんは考えている。

毎回10人から15人は新規出店者。つまり、年間100人くらいの作家が新たに市に参加している計算になる。市で人が店を出しているのを見て「自分も」と始める人も増えている。

「個性的な人が出てくることが街の財産です」と浦谷さん。

「それをまとめておられる浦谷さんの包容力もすごいですね」

と応じると

「場があるだけで…」

と浦谷さんは、はにかんだ。

滋賀県の人は保守的だとか言われるが、一皮むけば個性的なのである。それに刺激を受ける。

静かだけど情熱的な浦谷氏

◆年末のイベント

12月には栗東西中学校の生徒によるクリスマスライブや地元バンドの演奏会がある。青山地区の市では、イルミネーションを使ったイベント企画を温めている。

将来の展望は?との問いには、

「僕はこれが合っていて楽しくやらせてもらっているので、続けていくことかな。継続が力なので」

メガネの奥で瞳がキラリと光った。。

浦谷誠人

●うらたに まさと＝1978年5月23日生まれ。滋賀県守山市で育ち、現在、漁師・川魚佃煮店をしながら、NPO法人滋賀ものづくりネットを地域の仲間と運営

●NPO法人滋賀ものづくりネット
〒524-0104
滋賀県守山市木浜町1634
TEL077-585-1234
FAX077-585-1010
http://shiga-monodukuri.net/

旅を楽しみ自然にいやされ、パワーアップ

高島市くつきのＮＰＯ法人麻生里山センターと小誌が共同で開催する、共催イベント「秋の夜長を楽しむ夕べ」が４回目（平成１８年〜）を迎えた。〝セラピーロード〟で散策、旅の楽しさを語り合い、山里料理に舌鼓。

日　時／平成21年10月3日(土)13:00〜20:30
場　所／滋賀県高島市朽木麻生４４３　森林公園「くつきの森」やまね館
内　容／《Ⅰ部》
講　演　「旅が教えてくれたもの　風・土・光　そして水」
講師：西本梛枝氏（旅行作家）
散　策
座談会
《Ⅱ部》
「むつみ会の朽木山里料理夕食会」
ライブ演奏：小野みどり　他
司　会／宅磨 和宏
主　催／NPO法人麻生里山センター
協　賛／高島森林体験学校、MOH通信
後　援／高島市
参　加／60名
料　金／Ⅰ部:500円（千年椿の湧き水珈琲付き）　Ⅱ部:2,500円（夕食代込み）

旅のはなしを楽しく聞きました。遠方からの参加も

「くつきの森」を楽しんできたはなし

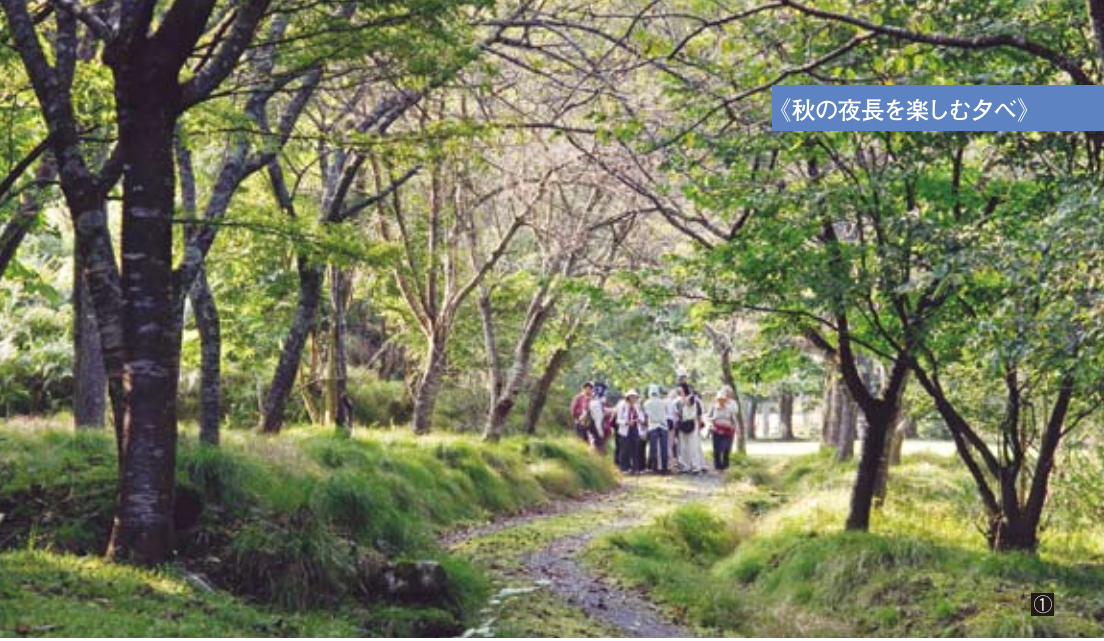
西本 梛枝
旅行作家

明け方まで雨だった。会の関係者は心配だったと思うが、私は雨が嫌いではない。昔は「雨見の旅」なんていうのもあったほどだ。樹木の沸き立つような匂いや葉っぱに降りかかる雨の音なんて、雨にならないと判らない。

２００９年10月3日、「くつきの森」での『秋の夜長を楽しむ夕べ』は朝には雨もやみ、秋日和（ヨッ、晴れ女！）。会場の「くつきの森・やまね館」の周りには夜に点灯するためのペットボトル灯器が既に木の上、岩の上…あちこちに置かれていた。灯が入ればどんなにきれいだろう。加えてこの日は十五夜。

第一部は森と都市文明の関わりの象徴として語られる「ギルガメッシュ神話」と不肖私メの旅を少しお話させていただいた後、セラピーロード〈ユリノキコース〉を「くつきの森」の指導員の方と一緒に歩く。樹木の名前、草の名前、森の生き物の暮らし等々、森を見ながら話を聞くのでよくわかる。かつての朽木は牛の餌のために、山は三分の二が草刈り山だったことなど、地元の方に聞かないとわからない話もあって

《秋の夜長を楽しむ夕べ》



①セラピーロード・ユリノキコースを歩く参加者　②広場の中央にはシンボルツリーのユリノキ　③指導員の中村さん
④秋の恵みを分けていただく

興味津々、好奇心膨張。

やまね館から20分ほどのユリノキ広場は広い芝生広場。この芝、天然芝だという。なんて素晴らしい。ここで結婚式もあるそうだが、花嫁は絶対喜ぶ！と思うほど美しい森だ。この森に冬が来て白い世界になったときもまた格別という話に、季節が明確に見える環境の素晴らしさをあらためて思ってみた。

千年椿の湧水でたてたコーヒーを飲みながらよもやま話の小休憩をして夕方を待つ。

夕方、ペットボトルに灯りが入る。山の端から十五夜の月も上がり、なんとも素晴らしい山の夜。誰かが「鹿が啼いているヨ」と囁く。

すっかり暮れてホールで夕食会とジャズライブが始まった。夕食は山里料理。鯖ずし、鯖そうめん、千切り大根やぜんまい、ひじきの煮物……。朽木の人たちの普段の惣菜だというが、地元の主婦グループ「むつみ会」の皆さまのぬくい手作り料理。大変な御馳走だ。

やがて三人のお子たちの「崖の上のポニョ」の歌とともに小野みどりさん

⑤輪になって「出会いが楽しい」　⑥タップリいただきましょう　⑦鯖街道に想いをはせる料理の数々　⑧小野家、加藤家のチルドレンが歌います　⑨ジャズライブ

のライブ開始。ガラス張りの舞台の背後は森。ペットボトルの中の蝋燭の灯がチロチロと揺れている。

なんて優しい夜…なのだろう。森の動物も草木もこの闇にじっと抱かれているのだ、と思うと、彼らと夜を共有している、という嬉しさがこみ上げてくる。

「森」にほんの少しアプローチしただけなのに、明るい興奮に酔いしれてしまった。

「お世話になりました」西本氏

西本椰枝

●にしもと　なぎえ＝1945年島根県生まれ。神戸大学教育学部卒業。小学校教師の後、旅行作家に。日本ペンクラブ、旅行作家の会等々会員。NPO法人びわ湖トラスト副理事長。著書／近江の文学風景を綴った『鳰（にお）の浮巣』『湖（うみ）の風回廊』、旅行ガイド本、詩集等々。

秋の夜長を楽しむタベ
今年も開催!!の巻
作:オノミユキ
高島市朽木にある「くつきの森」で、10月3日(土)に「秋の夜長を楽しむタベ」が開催された。まず、1部では、旅行作家の西本椰枝(なぎえ)先生に講演いただいた。
地域の文化などを子どもたちに伝えることは大切…
「風・土・光・水」のそろった人とところに「森」があるのです。
なるほど
……などといったお話が…
ガ!!!
あーっ
エライ失敗を!
と、スタッフのオノミユキ。
講演中の飲み水を出すのを忘れていた…
それに、「立てはなす」と先生はおっしゃっていたのに
えー…
低い演台を用意。
心はやわるそう。
ガビーン
なんてこった…なんてこった…
しかし西本先生は何ごともなかったかのように過ごして下さいました…
お…や…やさしい…こんな私にさえも…
講演後はセラピーロードの散策。
癒しの効果のある森に認定された、ロードをお話しながら歩いた。
「癒しのミニ旅」になったでしょうか…?
きもちよかったねー

●オノミユキ（本名 加藤みゆき）＝1974年生まれ。滋賀県坐賀町育ち。1997年に朽木村（現高島市）に移住。朽木の自然、行事、人間などを3冊の本にまとめ出版。現在は2人の子どもを子育て中。

「セラピーロードのエピソードが楽しい」アンケート

麻生里山センターによるアンケート集計です。当イベントも4年目を迎えました。ご参加あってのイベントです。初心に帰って皆様の声に耳を傾けました。来年はバージョンアップか？！

Aコースの皆様

《I部》

■基調講演

「旅が教えてくれたもの　風・土・光　そして水」

83．2点／100点

・自然に満たされる心がよく伝わって来た。
・地元（高島市、滋賀県）のよい自然を再確認できた。新しい発見があった。
・これからも自然を大切にしていきたい。
・農業をしながら感じていることだったし、都会の人々が田舎で耕地を守って欲しい。
・もっと具体的な旅の体験談が聞きたかった。
・高島に住んでいて幸せを感じさせていただいた。
・途中でいねむりしてしまった。
・普段、意識できないことを考えられた。
・全体が抽象的すぎてわからなかった。
・少々疲れた。
・時間をもう少し短く。
・日頃気づかないことを悟ることができてよかった。

■セラピーロード散策

89．9点／100点

・エピソードがたくさん入って楽しかった。
・時間と距離がもう少し欲しかった。
・もっと歩きたかった。
・リラックスできた。
・色々な発見ができておもしろかった。
・時期が好みと少し違った感じ。
・説明する方の声と内容が届かなかった。
・植物の名前を知ることができて大変興味深かった。
・芝生の空間が野趣を欠いた。
・川のせせらぎの音を聞かせてもらい、身近なものに心を寄せようと思った。
・初めて会った人との出会いがあって楽しかった。
・気分がよかった。
・エピソードも入って楽しかった。おもしろかった。
・ゆっくり案内してもらってよかった。
・もう少しリラックスして話してくれればよかった。
・少し単調。

■座談会
テーマ「旅の楽しみ方」
70．0点／100点

・いろいろな旅の楽しみ方を教えてもらい、参考になった。
・楽しい話ばかりだった。
・時間が少なかった。
・共感しながら参加できてよかった。
・もっと気楽にみんなの声が聞きたい。
・テーマに魅力がなかった。
・時間のわりに話す人が少なかった。
・話が抽象的すぎてわからなかった。
・もう少し発言しやすい（話したい）雰囲気を。
・雑談形式にしては？
・楽しかったが、普段話さない人の話を聞くと思いがけない話が聞けるのでは？
・言うことありません。
・少々聞き取りにくい。

その他

●イベントを知った手段

・知人から　（3）
・ちらし　（1）
・広報たかしま（1）

●申し込んだ理由

・自然に触れることができるので。
・ゆったりした時間が持ちたくて参加した。
・東海自然歩道の魅力を知りたかったから。制覇されて驚きました。

●その他感想

・来年も楽しみにしている。
・来年も参加したい。バージョンアップを期待している。
・初めてのことが多くてちょっとわからなかった。
・屋内が多かったので、外でゆっくりする時間もあればよかったのでは。

●反省点、改善するべき点

・基調講演を短く、散策を長く。
・座談会ももっと和やかに。グループ分け方式で行う。
・アンケート内容の充実。
知った手段、申込み理由、理由に合った行事だったか……ということを聞く。

＊点数は平均点を出した。
＊減点の理由、感想は、似たものはまとめ、短縮した文章にした。

Bコースの皆様

滋賀の空にトキが舞う?!

トキを牽引者とする、人が住みやすい環境づくりをめざして

松田 千春
芝田 理子
滋賀トキ・プロジェクトチーム

ライデン博物館所蔵のトキの剥製（大谷臣史撮影）

滋賀とトキ？　一見関係無さそうに思えるこのふたつですが、実はトキと滋賀は深い関係にあるのです。トキの学名「ニッポニア・ニッポン」は江戸後期に長崎のオランダ商館で医師をしていたシーボルトが持ち帰ったトキの剥製をもとに命名されたということはよく知られていますが、そのトキの剥製の故郷が滋賀県内ではないかという説があるのです。シーボルトが日本に滞在中、長崎から江戸に旅した際に記された『江戸参府紀行』の中には、1826年3月26日近江の国水口から土山に行く途中の大野（現在の甲賀市土山町大野付近と思われる）で2羽のトキの剥製を購入したことが記録されています。

私たちは、オランダのライデン博物館に今も保存されているシーボルトのトキが滋賀から持ち帰ったものであったら、すごい発見だ！と思い、早速、オランダに在留する友人のカメラマンにお願いして直接調べてもらいましたが、残念ながら、滋賀県産であるという確たる証拠は見つかりませんでした。

トキは、江戸時代から明治の始め頃までは日本全国に生息していたようですが、明治に入って乱獲や生息区域の環境の変化などでどんどん減少し、2003年に最後の日本産のトキ「キン」が佐渡島で死亡しついに日本から絶滅してしまいました。『江戸参府紀行』の中には、トキの剥製を大野で買い求めた件の中で「この辺りには白鷺と交じって降りてくる」とあるように、当時は滋賀でもトキがごく普通の鳥として生息していたようです。

トキは、薬用の他には一般的には食用にされておらず、特に目立った害鳥でもなかったため、記録があまり残っ

ていません。

他にも滋賀県内にトキが生息していた手がかりがないかどうかを調べていると、2009年3月に県内のある中学校でトキの剥製が保存されていることがわかりました。この剥製のトキが滋賀県で採れたものかどうかというのはまだわかりませんが、県内の他の学校にもこのようなトキの剥製が保存されていないかを探すとともに、DNA鑑定を行って日本産トキであるかどうかを調べていきたいと思っています。

2009年11月現在日本には124羽のトキがいますが、それらのトキは中国産のトキを「佐渡トキ保護センター」で人工増殖させたものです。トキを再び日本の空に羽ばたかせようという試みが始まっており、2008年の9月に第1回目、そして9月29日に第2回目のトキの野生への放鳥が実施されました。トキは、人里近くの里山に営巣し、水辺でドジョウなどを餌にして生息します。豊かな水辺環境を育む里地里山が広がる滋賀にはトキがかつてたくさん生息していたということは、容易に想像ができます。私たちのプロジェクトチームがめざすのは、トキを滋賀に連れてくるのではなく、そこに暮らす人や企業、研究者、行政が一体となって取り組みの中で、トキがかつて生息していた里地里山の環境とそこでの暮らしを再考し、森林の保全、環境に優しい農業の推進、多自然型の工法など様々な手法を用いて現代の暮らしにあった形で復元することが目標です。そうすれば、いつかきっと野生で繁殖をしたトキが滋賀の地を選んで来てくれるのではないかと期待しています。

さて、今年も放鳥されたトキの一部が本州に飛来し、居着いているということです。この調子だと、案外早く滋賀にも飛んで来るのでは?と甘い期待もしてみたくなります。トキがやってきた時に、滋賀の地に住み着いてもらえるような環境を用意しておきたい。それがそこに住む人にとっても豊かな暮らしにつながり、またいま注目を集めている「生物多様性」の豊かさを示さを示す分かりやすい指標となるのではないか。私たちはそのように考えて、滋賀・トキプロジェクトを進めています。

松田千春

●まつだ　ちはる＝滋賀県生まれ、滋賀県育ちの滋賀県職員。トキ・プロジェクトの他、なりゆき会や県庁塾、ゲテモノ倶楽部等の活動を通じ、「出勤が楽しみな県庁づくり」を模索している。

芝田理子

●しばた　りこ＝京都府生まれ。琵琶湖の水源である森林の魅力に引きつけられ滋賀県の林業職員に。滋賀の豊かな自然を将来の子ども達にも残して行くことを目指している。

●滋賀トキ・プロジェクト＝M・O・H通信の座談会における内藤正明先生の発言をきっかけに有志で結成された。

「下水道きれいな湖国の第一歩」汚泥焼却溶融設備

環人会ツアーVol.10

東北部浄化センター見学

◆日　時／2009年8月23日(日)
◆場　所／東北部浄化センター(彦根市松原)
◆案内人／近江環人２期生　杉本卓也(滋賀県職員)

「スラグ」使途が課題

彦根市松原町にある東北部浄化センター見学に伺いました。ＪＲ彦根駅から米原方面へ電車で1㎞ほど進むと、車窓の右手の山裾に工場のような施設が見えます。それが東北部浄化センターという下水道処理場です。センターでは職員の井上さんに下水道の役割、施設や水処理の仕組みの説明、施設見学の案内をしていただきました。

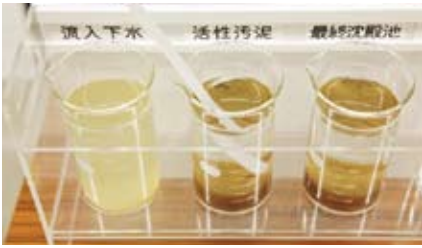
現地に到着し、まず会議室に入り滋賀県の下水道の役割と水処理の仕組みなどについて説明いただきました。滋賀県は現在、下水道普及率80％を超えており、全国で7位にあります。ここまで下水道が急速に普及してきた理由には、下水道の役割である「生活環境を改善する」、「水質を守る」、「浸水から街を守る」といったものがあり、琵琶湖を抱える滋賀県は、「琵琶湖の水質を守る」という意識の高さが特徴としてあります。またセンターでは富栄養化の原因となる窒素やリンを取り除くために、一部高度処理として急速濾過などを行っています。

実際の「汚水」もビーカーに入れて見せていただきました。茶色に濁った水で、顔を近づけると、独特のにおいが少しだけ鼻につきました。その他に処理途中の水や処理後の水も見せていただきましたが、処理後は透き通った綺麗な水になっていました。

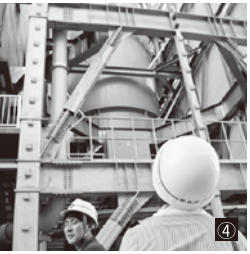
施設見学では、大きなコンクリートの水槽の上を歩き、水槽の中を上から覗かせてもらいました。水槽の中では茶色く濁った水が洗濯機のようにグルグルと回っていました。茶色に濁っているのは微生物であって、それらは汚れを分解してくれているのだそうです。意外かもしれませんが、ここでは臭いはほとんどしませんでした。水処理の施設を最後まで歩き、汚水が澄んだ水になったことを見届けた後、次に汚泥処理の施設へと向かいました。汚泥とは水処理の過程で出てくる汚れを塊にしたものです。この施設ではこの汚泥を固め、焼いてスラグという石のようにしています。この施設ができるまでは、汚泥は県外の会社で肥料化されていたのですが、会社が受け入れてくれなくなった場合などを考え、場内でスラグ化

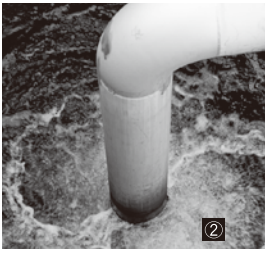
井上さんからレクチャー

汚水が透明になる段階



色とりどりのマンホールデザイン





①佐和山・大洞弁財天も近い。サンショウウオがいるとか　②微粒子を取り除く急速ろ過池　③濃縮汚泥を押し込んで水分を取り除く汚泥脱水機　④汚泥ケーキを一時貯留するケーキ貯留層

することになったそうです。スラグは工事の埋め戻し材などに使われていますが、現在は使用量よりも発生量が多く、また今後も汚水量は多くなるためスラグの利用方法について苦慮されているようでした。

今回の施設見学でセンターの中を一通り回らせていただき、自分たちの体から出たものが、下水道管を流れてどのように処理されていくのかを、目・耳・鼻などを使って実感し、下水道を利用する者の責任について考えさせられるものでした。最後に施設見学に準備・協力いただいたセンター職員の井上さんをはじめ多くの職員の方々に御礼申し上げます。ありがとうございました。

〈MOH-ECOTOURISM－13〉

塩の道

檀上 俊雄
ジオグラフィックライター

栂池からは高原地帯の道となり、松本までは佐野坂の峠道があるだけで困難な道中ではない。松本城下ではこの北塩ばかりか、三州街道や秋葉街道から三河や駿河の南塩が塩尻を経て運ばれていた。さらに高山を結ぶ飛騨街道は鰤街道と呼ばれ、能登から多くの塩漬けにした寒ブリが運ばれたという。写真は白馬村神城に残る塩の道に設置された石標。

各地の山を登り歩いていていつも気になるのが、かつての峠道の多くが消えかかっていることだ。山の向こうの集落をつなぐ道であり、先人たちが歩いて越え、私たちには想像を超える喜びと苦しみが滲む峠道である。残された峠道にしても、拡幅されて車道となり、いつしか峠はトンネルとなり、さらに長いトンネルと谷をまたぐ橋からなる自動車道となっていて、戦後60年あまりの変化はめまぐるしい。

私は自らの明日を切り拓くことで汲々とした日々を送っているが、そうした時に私の今は亡き父親はどう考え実践したのだろうかとよく考える。先人とは実はだれかにとって愛すべき存在であった人をいうとすれば、誇るべき生きざまを受け継ぎ伝えて今日の私たちがあるといえるだろう。さらに古い時代の歴史をひも解けば、私のちっぽけな悩みなどとは次元の違う壮絶な生きざまは枚挙にいとまがない。

街道と呼ばれるものは絵図や案内書などが残ることもあるが、村びとが通るだけの峠道や山道などは土地の境界をめぐる争論でもないかぎりは伝承で口伝えされるだけだ。自ら道普請をし自給自足の生活を基本とした閉鎖的な社会であったなかで、庶民といえども塩だけはどうすることもできず、外部に依存せざるを得なかった。

塩の道千国街道は糸魚川から松本を結び、関所が小谷村千国に置かれたことから昔からそう呼ばれた。豪雪地帯で知られるが、そうした冬にも歩荷（ボッカ）で、いくつもの峠を越えて塩が運ばれたという。写真は千国から栂池の間の親坂で、今も往時の面影が残る。

海岸から内陸へ続く塩の道。宮本常一『塩の道』などの本を開けば、日本列島における塩ネットワークの概要を知ることができる。そして地方の中心のまちから村々へ運ばれたことも容易に想像できる。そしてこの道は単に塩が運ばれただけではなく、塩を中心とした食文化をあわせて伝え、さらには世の中の様子や動きまでも伝える道であったことを知るのである。これが自動車の普及によって車道が登場する私たちの親の時代まで、米などの穀物を中心とした食生活が始まる中世から続いていたのである。

塩の道は、「敵に塩を送る」という上杉軍と武田軍のエピソードが残る信濃の話だけではなく、海から離れた私たちの湖国においても同様にあって、県内各地に残されている。なかでも根来坂や水坂峠を越える若狭から京の都への鯖街道はよく知られていて、ひと塩の鯖ばかりか様々な海の幸に塩がまぶされて運ばれた道であり、実際には鯖街道というよりも塩の道と呼ぶにふさわしいものだ。

北前船の荷を運んだ粟柄越、敦賀街道愛発越や黒河峠、さらに深坂峠、新道野峠、余呉と敦賀を結ぶ刀根越もそうだ。中河内では敦賀への塩買い道が、車が普及する前まで3ルートもあったという。湖西湖北ばかりか、湖東の鈴鹿越えの多くの峠道はすべて伊勢街道であり、近江商人が多く越えたという治田峠、千草越、武平峠や鈴鹿峠も帰り荷で伊勢湾や三河湾の塩が持ち込まれたことだろう。そして瀬戸内からの塩は大坂から淀川をさかのぼり伏見や宇治を経て湖南へもたらされたのである。

庶民の口にする塩は昔は荒塩であり、現在使われているような精製された真塩はごく一部であった。さらに魚を腐らせないためにもまぶし、塩漬けにした。魚だけではなく、荒塩の普及によって豆腐やうどんが作られ、調味料として味噌や醤油の醸造が可能となった。これらが峠道を越えて街から山間の村々まで運ばれたという状況を思いはかれば、単にものが運ばれた道というよりも塩を媒体とした文化の道ということができるだろう。

道は歩くことによって次の世代へ伝えられる。伝統を捨ててでも激動の時代を生き抜いてきた私たちは、皮肉なことに環境の時代を迎えて青春を謳歌した1970年代あたりの状態まで舞い戻る必要に迫られている。この際、親や多くの人の喜びや悲しみの刻まれた道を改めて歩いて、彼らの生きた貧しくとも心豊かな時代を改めて理解する必要もありそうだ。これによってはじめてバトンを受け、渡す資格を得ることができる。

私たちは親から子へバトンをつないで生きている。塩の道は暮らしの道である。そうした峠道はそれぞれの世代を知る貴重な手がかりとなるかけがえのない生活遺産であり、役目が済めば捨ててしまえる軽い存在ではないようだ。

檀上俊雄

●だんじょう　としお＝1951年広島県尾道市生まれ。立命館大学文学部地理学科卒。山と自然研究会青山舎代表。日本旅のペンクラブ会員。
著書／『比良山・湖西の山』（山と渓谷社共著）

自分づくりに挑戦しよう

その三

井上 昌幸

今回も中国の「四書五経」と言われる古典などから私たちが学んでおきたい言葉などを取り上げていきます。

子曰く、参や、吾が道は一以って之を貫く。曾子曰く、唯。子出ず。門人問うて曰く、何の謂ぞや。曾子曰く、夫子の道は忠恕のみ。（論語・里仁第四）

孔子さんは弟子たちに「仁」を中心に教えられたが、この文章は特に有名で、下村湖人の訳を転載します。

○先師がいわれた。「参よ、私の道はただ一つの原理で貫かれているのだ。」曾先生がこたえられた。「さようでございます。」先師はそういって室を出て行かれた。すると、ほかの門人たちが曾先生にたずねた。「今のはなんのことでしょう。」

曾先生がこたえていわれた。「先生の道は忠恕の一語につきるのです。」

忠は自分の真心に訴えること、恕は自分の心を他におし及ぼすことで、真心からの同情による愛の実践という意であり、「仁」に近い表現です。

子貢問うて曰く、一言にして以って身を終うるまで之を行なうべき者有りや。子曰く、其れ恕か。己の欲せざる所、人に施すこと勿れ。（論語・衛霊公第十五）

前の文章に近いが分かり易い内容なので、同じく下村湖人

の訳を転載します。

○子貢がたずねた。「ただ一言で生涯の行為を律すべき言葉がございましょうか。」先師がこたえられた。「それは恕だろうかな。自分にされたくないことを人に対して行なわない、というのがそれだ。」

「恕」とは思いやりである。「其れ恕か。」はそれは思いやりであろうか、と断定をひかえた言葉である。

私たちの日常生活で、「自分にされたくないことを人に対して行なわない」という「恕」を貫くことはむつかしいことです。自分にされたくないことを人からされた場合、誰でも腹が立ちます。ですからせめて自分にされたくないことを人に対して行なわないように自ら律する心構えが大切なのです。

□子曰く、それ仁者は、己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す。能く近く譬を取る。仁の方と謂うべきのみ。（論語・雍也第六）

○いったい仁というのは、何もそう大げさな事業をやることではない。自分の身を立てたいと思えば人の身を立ててやる。自分が伸びたいと思えば人も伸ばしてやる。つまり、自分の心を推して他人のことを考えてやる。ただそれだけのことだ。それだけのことを日常生活の実践にうつしていくのが仁の具体化なのだ。

今の日本人は自己中心になり、他人への思いやりが少なくなっているように感じますが、本来、日本人の心は聖徳太子の十七条憲法「和をもって貴しとなす」を遺伝子として持ち続けているはずなので、「温故知新」の言葉のように、古くても大切なものを尋ねて、暖めるように努めたいものです。

私たちは集団の中で一個人として存在しているのであり、集団から離れて独立した自己ではなく、自分、つまり分際をわきまえた自己として、ある規範の中で行動していきたいものです。そしてそこには思いやる心が大切です。

私たち日本人は温暖な気候に恵まれ、農耕民族として五穀豊穣を大自然である八百万神に祈願していました。

村には鎮守の森があり、村人たちは田植えの日取りを決めるために社に集まり相談したことでしょう。「社会」の語源はここから来ており、「漢字源」によりますと、「昔、土地の神を中心として二十五戸を一つの単位とした、その集まり。また、社日を決めその日に行なった部落の会合」と書かれています。このような歴史や伝統文化を忘れないようにしたいものです。

井上昌幸

●いのうえ まさゆき＝1940年1月1日生まれ。現在、滋賀県異業種交流連合会会長、STEP21（滋賀県シニアテクニカルエンジニアリングパートナーズ企業組合）専務理事、関西師友協会活学塾講師、大津木鶏クラブ代表世話人、近江素交会代表世話人

〈商家の家訓の話　第11回〉

初代塚本定右衛門の道歌

末永 國紀

振袖・浴衣などの着物類やアパレル、ユニフォームなどを扱う総合繊維商社の㈱ツカモトコーポレーションは、東証一部上場企業である。文化九年（一八一二）を創業年とする老舗企業であり、近江商人の歴史館である東近江市の聚心庵（じゅしんあん）も運営している。

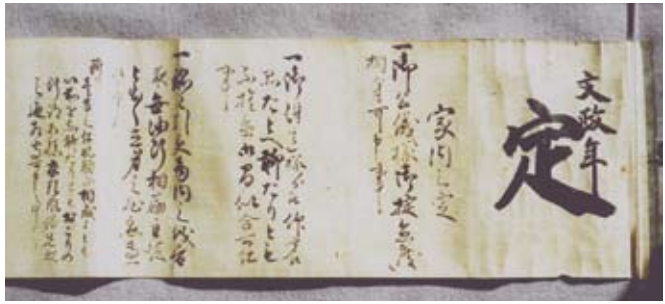
業祖は、塚本定右衛門。幼名は久蔵、法名を定悦と号した。寛政元年（一七八九）に、近江国神崎郡川並（かわなみ）村（現、東近江市五個荘）に生まれた。ささやかな布洗いを業とする父浅右衛門・母「のゑ」の五男三女のうちの、三男である。

幼少の頃から機敏で利発であり、感受性が豊かであったといわれる。たとえば、ある時、富豪の家を訪れた際、富家の主人であるにもかかわらず自ら薪を納屋に運ぶ姿に触発され、帰宅後ただちに鍬を取って畑を耕しに出向いたという挿話が遺されている。

久蔵は一二歳で父の浅右衛門を亡くした。その臨終の席で、将来を期待されていた久蔵は、父から「慎みに努め、人道を守り、成長の後は立身して、父母の名前を顕すことこそ孝養の第一である」との遺戒を受けた。父の遺したこの言葉が、久蔵の生涯を貫くバックボーンとなった。

文化四年（一八〇七）に一九歳となった久蔵は、満を持して金五両を元手に、京都から取り寄せた高価ながら携帯に便利な化粧品の小町紅（こまちべに）等を仕入れて東国への持下り（もちくだり）商いに出かけた。以下は、晩秋に下野国（しもつけ）（栃木県）の芦野（あしの）宿まで足を伸ばし、止宿した時の逸話である。

奥州街道のこの宿駅の旅籠（はたご）にも、宿泊者への給仕人と売春婦を兼ねた飯盛り女がいた。旅籠の亭主は、年若い行商人の久蔵を見てしきりに遊興をすす



初代塚本定右衛門の家訓「家内の定」

めた。

父親の遺言を胸に秘めて行商を始めたばかりの久蔵は、亭主の熱心な誘いを固辞した。すると立腹した亭主は、腹いせに薄い布団しか与えなかった。晩秋の霜気に震えながら夜を明かした久蔵は、次のような道歌を詠んだ。

わかきとき遊びに心あるならば
　のちのなんぎとおもひしるべし

後年、この時の紅売り姿を絵に画いて軸装し、創業の辛苦、商いの基本を忘れないようにとの自戒をこめて、正月などの佳節の床飾りとした。

久蔵は二四歳となった文化九年（一八一二）、甲斐国甲府柳町の土蔵を借りて資本金一二〇両で小間物問屋「紅屋」を開店した。甲府に店を開いたのは、江戸につながる重要な街道である甲州街道の終点であり、甲斐絹の産地でもあるという有力地方都市であることに加えて、高価な小町紅がもっともよく売れたところでもあったからである。

文政一二年（一八二九）三月、四一歳となって厄年を迎えた久蔵は、家業の商いも基礎が固まり、これから大いに乗り出そうという時に、「一心定まる」という意味で、代々の襲名となる定右衛門に改名したものと思われる。同時に、店員への訓戒書である「家内之定」を制定している。

全八カ条からなる内容は、公儀の法度を守ることという定例の形式で始まる。

次いで、銘々の部署で昼夜油断なく主従ともに励み、立身を心掛けること。たとえ上役になっても初心を忘れず、奢りを慎むこと。縁故者に内々で便宜を図ることを厳禁する。血気にまかせて派手な商いをしないこと。常に傍輩の和合を重んじ、心掛けること。旅宿においても、少々のサービスの手落ちは堪忍して神妙に旅すること、また高声の雑談は慎むこと。飲酒はどれほどまでという制限はないが、平常心を失わないように適量をたしなむこと。

末文では、これらの教えを守って和合して家業に励めば、立身出世は疑いなく、老後も安泰であり、忠孝の道や国恩に報じることにもなるので、このように家内の掟を定めるのであると記している。

晩年の定右衛門は、致富の道を訊ねられて次のように答えている。致富に到る奇策というものはない。ただひたすら勤倹に努めることである。だが、商業上において片時も忘れてならないことがある。それは、第一に得意先の利益を図ることである。そうすれば、おのずから自家の繁昌は間違いないと語ったという。この信条を定右衛門は、次のような道歌に詠んでいる。

おとくいのもうけをはかる心こそ
　我身の富をいたす道なれ

近江商人に学べ

末永國紀

●すえなが くにとし＝1943年生れ。同志社大学経済学部教授。経済学博士。（財）近江商人郷土館館長。
著書／『近代近江商人経営史論』（有斐閣）、『近江商人』（中公新書）、『近江商人学入門』（サンライズ出版）

オノミユキ流
旅の楽しみ方
作:オノミユキ
の巻
さて、「秋の夜長を楽しむ夕べ」の座談会で、「旅の楽しみ方」について話し合ったので今回は、オノミユキの「旅」を紹介します。
オノミユキは、いつも目的のある旅をする。
例えば、○○山の頂上に立つ!○○を食べる!○○の名所!!
目的を持たずにぶらりと行きあたりばったりの旅もしてみたいんだけど…
せっかちな性格なので
次は…!
次は…!
どうもできない。
目的の中でも一番多いのは、「知人を訪ねる旅」。
メメちゃん
久しぶり~!!
遠い所では、学生時代、アフリカのタンザニアに住む少女に会いに…
近い所では、隣の集落のおばあさんを訪ねたり。
こんにちは~
住んでいる人に会うと、その地域のことがよくわかる。
へえ~
へえ~
そういえば、西本先生も…
地域のことを知り…
ニヤリ
座談会でも…
地元の人と話すことで、広がることが…
よォし、レッツゴー!地元の人に会う旅だ!
行き先は新潟!
学生時代の友人に会うため、家族4人で旅に出た。
まず、安曇川駅から敦賀駅まで新快速で。
びわこ

窓からの風景は、山に囲まれた小ぢんまりしたムラ。
いいとこだねー
敦賀からは特急で。子どもたちは大はしゃぎ。
わーい！特急だ！
杉本には特急はおろか、電車が走ってない。
それなのに…
連休なのに…
がラがラ～
弁当売りのお姉さんもやりがいなさそう。
お弁当～、おみやげ～
車掌さんも手応えないだろうなー。
えー、のりこしされた方いらっしゃいませんかー～
さて、降りた所は、ヒスイの町、糸魚川！！
わー。デカい石
友人とも8～13年ぶりに再会！
久しぶり～
変わらへんなー
友人の家ではお母さんが心温まる歓迎をしてくれて、
いらっしゃい！
さすが海の町！と思わせる程の海の幸を食べさせてくれた。
中でも、甘えびの殻でとったダシに、もずくを入れたみそ汁は珍しかった。
もずくがコリコリしてる！
それにしても、新潟の人の温かさにはおどろいた！
絶対歩行者優先！
うちの子がとび出そうとしても、ピタッと止まり、文句ひとつ言わない。
関西なら…
こりゃと！どこみて歩いとんねん！ひかれてもしらんぞ～っ!!
旅館の方々も、花屋さんも中学生も、駅員さんも、みーんなみんな優しかった新潟。
家族みんな感動～♡の嵐
にいがたのんやさし～い
新潟の人を見習わねば！と思いつつ…
こら～～!!
何しとんねん～!!
にいがた！にげたい～

心温まる物語

生きてる 生きてる

今関 信子

イラスト：千田 満

イベントで、ユウは初めて釣りをした。凧糸がくくりつけられた五十センチほどの竹を、子どもの水遊び用プールに差し入れる。すると、すぐに手応えがあって、真っ赤なアメリカザリガニが釣れた。バケツに放すと、ザリガニは怒りの塊になって、大きなハサミを振り上げた。不規則に動く触覚や丸の目、プチプチ泡を吹く口を、三歳半のユウは、初めて見た。

「すごいの釣ったねえ。ユウちゃん、釣り、うまいなあ。」

「これ、ザリガニの王様じゃないの。かっこいいよねえ。」

両親に褒めそやされて、自分の身にすごいことが起こったのだと、ユウは自覚した。折を見てはバケツをのぞく。そのたびに、ザリガニは、ハサミを振り上げ、触覚を振り、全身でユウを威嚇した。そのたびに、ユウはたじろいで、間もなく、ザリガニへの関心はすっかり失せた。

数日して。

「ザリガニさん、死んでるわ。」の声に、ユウは飛んで行って、バケツの中を見

た。ザリガニはバケツの底にのびいた。もうハサミを上げることはない。
「暑かったからねえ。ザリガニさんの水、温かくなってしまったのね。」
この数日、金沢は暑くて、ユウはプール三昧だった。プールは気持ちよかった。シャワーは冷たくて、元気が回復した。
「だから、プールに入れて、シャワーしてあげればいいんだよ。」
とつぜん、だからと、論理の飛躍のある提案をされて戸惑う母親そっちのけで、ユウはじしんたっぷり言った。
「シャワーすれば、元気出るよ。」
ユウの考えていることが飲み込めた母親は、静かに次の行動に移った。
「死んじゃったから、お墓を造って上げようね。」
ユウは、母親が掘った穴にザリガニを入れても、まだ「死んだ」ということが、どういうことか理解できなかった。が、土をかけると、一瞬のうちに理解した。とたんに、彼は落ち込んだ。
次の日も、ユウは黙りがちだった。バケツのあったところへは行かない。見ないようにしている。
父親が、おたまじゃくしを取ってきた。泳ぐおたまじゃくしを見て、ユウは、
「生きてる、生きてる。」
と、飛び跳ねた。遊んでいても、時間をおいては見に行って、「生きてる、生きてる。」と、手を叩く。寝る前、生きていることを確認して、起きるとすぐ見に行く。おたまじゃくしが尾をくねらすと、満面の笑みをうかべて、「生きてる、生きてる。」と、ジャンプした。
しばらくして小さなカエルは、水槽から放たれた。おたまじゃくしは、カエルになったのだ。カエルが跳ねる。ユウも跳ねる。
「生きてる、生きてる。」
「死」を経験して、生きていることを実感している三歳半の声が、田圃に弾ける。
「生きてる、生きてる。」
生きているだけで、こんなにも嬉しいのだ。丸ごと弾む。全身が歌う。

●いまぜき　のぶこ＝1942年、東京生まれ。東京保育女子学院卒業後、幼稚園教諭となる。7年間保育者として働いた後、創作活動にはいる。日本児童文学者協会理事。
〈主な著書〉『小犬の裁判はじめます』1987童心社　青少年読書感想文コンクール課題図書。『さよならの日のねずみ花火』1995国土社　青少年読書感想文コンクール課題図書、厚生省中央児童福祉審議会推薦文化財。「地雷の村で「寺子屋」づくり」2003PHP研究所など多数

●せんだ　みつる＝1950年、滋賀県生まれ。大阪のデザイン会社を経て1980年「イラストレーションスタジオアビーロード」設立。イラストレーションを中心にポスターやパンフレット等を制作、ロゴマークやパース・キャラクターデザイン等グラフィック全般、広告・エディトリアルを中心に活動中。

愛着

畑　裕子

イラスト：徳永 拓美

我が家には二台の車がある。二人家族なのに、と思うが、田舎住まいには欠かせない。そのうち一台にするつもりなのだが。考えてみると界隈のほとんどの家は大人の数だけ車を保有している。やむにやまれぬこととはいえ、地球を汚していることには違いない。

自然が豊かで空気のきれいな地に転居してきて、排出ガスをまき散らしていることを思うと矛盾を感じざるをえない。そんな思いに浸っているうちに七年前に廃車にした軽自動車のことが甦ってきた。私が家人の反対を押し切って運転免許を取得し、初めて購入した私の車である。

十五年間愛用し、その間、数えるほどしか故障しなかった優れものの車であった。が、さすがに長年乗っていると車体が劣化し、錆びて雨滴が入ってくるようになった。ついに、最後の時がきたのだと別れの盃を交わしたものである。

車検のたびにもう買い換えるべきかと何度か考えた。が、車検を続け、老衰死ぎりぎりまでお世話になった。古い車は排出ガスをたくさん出すことは重々承知であったが、それでもおさらばできなかったのは、ただ愛着心とかもったいないの精神からのみきているのではなかった。

十年目に入り、私はいつも車検を担当してくれる人に「もう乗り換えた方がよいかと思うのですが、捨てきれなくて」と小声で言った。すると彼は「車を大切に乗っていただけるのは修理工冥利につきます」とにこやかに応対した。秋なのに私はいっぺんに春の気分になり、この方は本当に自分の仕事に誇りを持っている人なのだと、あらためまじまじと顔を見つめた。まだ三十代になるかならないかの男性が発した言葉に私は高邁な哲学を教えられた思いであった。

「まだ乗っているの」と知人が冷やかし半分に言ったように、数年で乗り換える人も少なくない。「買うのを惜し

んでいるわけではないのだけれど、私の初めての車だっただけになかなか手放せなくて」と弁解めいたことを言った。すると「古い車は車検料金も高いでしょう」と彼女は言う。確かにそのとおりだが、私の耳の奥には高邁な哲学が根付き、そんな意見などものともしないのだった。

ヨーロッパの多くの国で日本車が重宝されている。ドイツに住む娘も日本車に乗り、すでにメーターが一回りしているという。ちなみにかつての私の愛車は一回りするどころか走行距離は十万キロには満たなかった。かの国では車は十年、二十年近く乗るものと思われているそうだ。娘もそのつもりでいるようだ。

現在乗っている車も早、七年になる。車マニアならずとも買換え時といえるかもしれない。エコカー減税などとテレビのコマーシャルも宣伝し、新聞のチラシも毎週のように折り込まれ、購買意欲をそそっている。不況の折、経済効果もプラスされるであろうし、環境のためにも良いだろう。が、私の気持ちは少しも揺るがない。ただ、いつか購入する時はハイブリッド車にしたいと思っていた。

ところが、である。最近、あるテレビを見て疑問を抱くようになった。それはハイブリッド車とそうでない車の走行時の騒音の実験であった。実験台となった年配の方が車が近づいてくると手を挙げるのだったが、ハイブリッド車の場合は間近までこないと車の音が聞こえないのである。静かな音があだとなって交通事故につながりかねない。

私は唸った。こちら良ければあちら悪し。いったい何を第一義に考えるべきか。そのうち改善され、より良いものが市場に出回りますよ。どこかでそんな声も聞こえてくる。確かにその通りだろう。だが、一つ改善されてもまた別個の不具合が生じないとも限らない。高度に発達した社会の持つ矛盾の中でいよいよ私たちは何を大切にするかの順序づけを必要とする時代に入ったのかもしれない。その一方、「愛着」といった個人的な感情もおろそかにしたくないのである。

畑裕子

●はた ゆうこ＝1948年京都府生まれ。奈良女子大学文学部国文科卒業、京都で国語教師を勤める。その後、滋賀県に転居。1993年・第5回朝日新人文学賞受賞、1994年・第14回地上文学賞受賞、滋賀県文化奨励賞受賞。主な著書「画・変幻」「近江百人一首を歩く」「椰子の家」「近江戦国の女たち」など。日本ペンクラブ会員。

徳永拓美

●とくなが ひろみ＝1949年生まれ。日本画を学び、日春展、京展、新興展、滋賀県展に入選を経て挿絵も描く。「いぶきのやさぶろう」（京都新聞社）、「守山の野鳥ガイドブック」（守山市立教育研究所）、「甲賀のむかし話し」（サンライズ出版）、「イルカをおそった黒い波」（汐文社）など。レイカデイア大学「手作り紙芝居講座」講師。

♪MOHせんりゅう2009♪
ベスト3決定

おめでとうございます！！
243票の投票をいただき、15句から選んでいただきました。
素晴らしい作品をつくっていただいた皆様、お選びいただいた皆様
心から感謝いたします。
素晴らしい作品を頂戴いたしました。

《1位》
もうすこし　スリムになろう　身と暮らし
野洲市　ひめ
（評）無理せず、長ーいおつきあい

《2位》
もったいない　手にあまるほど　もうもたない
高槻市　高橋秀太
（評）事態は深刻です

《3位》
もったいない　うしなったら　もったいない
大津市　嘉田由紀子
（評）後悔先に立たず

《次点》
足るを知る　生き方　こそがカッコイイ
東京都　有村治子
（評）足るを知り、足らざるを知り

もったいないで　貯えすぎた　メタボかな
SI長浜　北村
（評）貯蓄は大事です、体も大事

未来の力　左右するのは　わたしたち
（評）築こう未来銀行

※評は故中井三雄「湖国と文化」編集長からいただきました

♪MOHせんりゅう♪ コンテスト2010 エントリー作品発表

♪ MOHせんりゅう
コンテスト2010
エントリー作品でっす ♪

力作ぞろいです
次回の執筆者懇談会で
ベスト作品を絞り込みます
お楽しみに
※今なら間に合うエントリー

●ほどほどに　でも　向上心も　忘れずに

●エコとエゴ　こころざし一つで
　エコになる

●何を買う？　求められてる　エコ眼力

●〝身土不二〟〝知足〟が好きです

●今の地球　このままいくと　もたないよ

●いにしえの　知恵と想いを見習って
　今に生かそう　地球力!!

●小さくとも　キラリと光る　国になろう

●叱られても　伝えたい
　もったいない　おかげさま

●ふと気付く　四季の自然を　残したい

●自分には　何ができるか　考えよう

●ハンパねえ　死ぬほど　あつい　温暖化

●もったいない　うたた寝しながら
　テレビつけ

●子どもたちに　残そう　大事な地球！

●米糠ボカシ　有機肥料
　うまい米、野菜

●みんなのため　自分のための
　ココロ活動

●エコバッグ　持ち歩けば　エコになる

●もったいない　その一言で　変わる未来

●あわせよう　地球の歩幅に　あわせよう

●エコなこと　いちにちみっつ
　やってみよう！

●MOH一度　くじけず　再チョウセン

●ちょっとまて　がっつかないで
　ほどほどに

●二日酔い　そんなに嫌なら
　飲むなばか

●温暖化　死ぬほど暑い　温暖化

●琵琶湖から　もったいないが
　流れていく

●「ムダなくし」が、不況から抜け出す
　道である。

●もったいない　思う心に　エコ芽生え

●もう（MOH）いらん
　孫の住む地を汚すもの

●滋賀にとつぎ　びわ湖の水を
　かんがえる

●寝るとこない　もったいないで
　ためすぎた

●もったいない　ここまで使える
　ありがたい

●ものづくり　もとにもどせば
　はながさく

●むだむだと　言うよりは　まず実行

●考えよう！　エコの楽しさ　大変さ

●蒸しタオル　ビニール袋で　暖をとる

●思いはせ　感謝の心で　いただきます

●もうもうと　モンクいうのも
　ほどほどに

●賞味期限　切れたら　捨てるの
　もったいない

●もったいない　仕事で　コピーは
　ほどほどに

●いつまでも　あると思うな　命と金は！

●山は是れ青々　花は是れ紅々

●なんとなく　困ったときの
　MOH通信

●物あふれ　心いづこへ　行ったやら

●ありがとう　幸せ色の　合言葉

●ありがとう　今日も感謝で一日が

●ご縁ある　みなが元気で　年の瀬に

●もったいない　そんな心で　リサイクル

●鍋かこみ　みんな元気で　ありがとう

講演日記

皆様のご支援でたくさんの講演依頼を頂きました。2009年9月～11月の講演をダイジェスト版でお知らせします。

第三回EPR部会シンポジューム「石油ピーク後の変革のキーワードEPR」

- 日時：9月15日
- 主催：もったいない学会EPR部会
- 対象：会員ほか一般
- 演題：第一部・EPRの求め方と評価事例　第二部・EPR的視点で石油ピーク後に備える
- 会場：東京大学　山上会館
- 参加：60名
- 後援・司会：MOH通信

執筆者懇談会17

- 日時：9月29日
- 主催：執筆者懇談会
- 対象：MOH通信関係者
- 演題：26号、27号編集会議
- 会場：山科　安兵衛
- 参加：18名

第2回栗東市生涯学習のまちづくり講座

- 日時：10月1日（金勝）：10月17日（大宝東）：10月30日（葉山東）
- 主催：栗東市役所生涯学習課
- 対象：生涯学習推進委員
- 演題：Mもったいない　Oおかげさま　Hほどほどに　が地域を元気にする！
- 会場：各コミュニティセンター
- 参加：50名
- 講師：辻村琴美

秋の夜長を楽しむタベ

- 日時：10月3日
- 主催：麻生里山センター
- 対象：一般
- 演題：旅が教えてくれたもの　風・土・そして光」
- 会場：森林公園「くつきの森」やまね館
- 参加：60名
- 後援：高島森林体験学校、MOH通信
- 講師：西本梛枝

レディース中央会全国フォーラムin滋賀

- 日時：10月20日
- 主催：全国中小企業団体中央会、滋賀県中小企業団体中央会
- 対象：会員
- 演題：「葦　良しよし～　環境よし　三方良し　暮らし良し～」
- 会場：大津プリンスホテル
- 参加：378名
- 講師：戸田直弘（琵琶湖漁師）
- 発表：渡邊よしこ、辻村琴美

環境配慮型工場見学（エコビジネス・トリップ）

- 日時：10月21日
- 主催：びわ湖環境ビジネスメッセ
- 対象：申込者
- 演題：中小企業にしかできない持続可能型社会の企業経営
- 会場：新江州
- 参加：14名
- 講師：森建司

第14回サステイナブル経営戦略会議

- 日時：10月21日
- 主催：サステイナブル経営戦略会議
- 対象：会員
- 演題：これからのエネルギーをどのように確保するか
- 会場：浜湖月
- 参加：20名
- 講師：石井吉徳、天野治
- 参加：14名
- 講師：森建司

びわ湖環境ビジネスメッセ2009同時開催セミナー

- 日時：10月22日
- 主催：NPO-EEネット
- 対象：一般
- テーマ：石油ピーク後の新エネルギー・環境ソリューションセミナー
- 会場：長浜ドームセミナー室
- 参加：70名
- 講師：柴田正明、石井吉徳、天野治、森建司

びわ湖環境ビジネスメッセ2009主催者セミナー

- 日時：10月22日
- 主催：滋賀グリーン購入ネットワーク
- 対象：一般
- テーマ：ミスター70%から学ぶ！「持続可能な

社会に向けた産業界の役割とは」
●会場:長浜バイオ大学
●参加:100名
●講師:西岡秀三
●スピーカー:旭化成住工・松宮秀典、新江州・辻村琴美、たねや・木田幸司、NECセミコンダクターズ関西・西口佳孝

エネルギー産業企業化研究会による先進企業視察会

●日時:10月23日
●主催:敦賀商工会議所
●対象:会員
●テーマ:循環型社会システム研究所開設の経緯など
●会場:新江州eプラザ
●参加:14名
●講師:森建司

地域活性化フォーラムin滋賀

●日時:10月26日
●主催:財団法人地域活性化センター、滋賀県
●対象:地方公共団体職員、NPO・社団・財団・などの非営利組織関係者、地域づくり団体関係者、民間企業、学生、一般
●テーマ:地域の特性を活かした魅力あるまちづくり〜市町村合併後のまちをどうつくるか〜
●会場:長浜文化芸術会館
●参加:450名
●講師:田原総一朗
●パネラー:岩崎恭典、川島信也、髙橋政之、辻村琴美、南部厚志、前澤和也

滋賀県立大学広報誌「県大jiman」学生スタッフ研修会

●日時:10月28日
●主催:公立大学法人滋賀県立大学事務局
●対象:学生広報スタッフ
●テーマ:編集の心得、大事にしなければならないこと、取材や原稿執筆のポイント
●会場:同大学A1棟会議室
●参加:6名
●講師:辻村琴美

大阪商工会議所会頭専務理事近畿大会

●日時:10月29日
●主催:大阪商工会議所
●対象:関係者
●テーマ:中小企業にしかできない持続可能型社会の企業経営
●会場:北ビワコホテルグラッチェ
●参加:70名
●講師:森建司

移り住むなら滋賀県湖北田舎暮らしフェスタ

●日時:11月1日
●主催:湖北移住交流支援研究会
●対象:一般
●テーマ:ブース出展
●会場:旧余呉小学校
●参加:50名
●出展:MOH通信

キラリン445

●日時:11月4日
●主催:びわ湖放送、滋賀グリーン購入ネットワーク
●内容:買うならエコ!とっておきエコ情報
●会場:BBCスタジオ
●ゲスト:辻村琴美

経営者「環境力」大賞滋賀シンポジウム

●日時:11月16日
●主催:NPO法人環境文明21
●対象:経営者
●テーマ:21世紀をリードする経営者の資格、経営者「環境力」大賞説明
●会場:コラボしが21会議室
●参加:40名
●講師:内藤正明
●パネリスト:森建司、藤井正男、田中稔、田中正敏、加藤三郎、藤村コノヱ

eプラザ見学と会社訪問

●日時:11月19日
●主催:室蘭商工会議所企画業務グループ
●対象:会員
●テーマ:環境倫理としてのMOH活動内容
●会場:新江州eプラザ
●参加:8名
●講師:森建司

滋賀グリーン購入ネットワーク設立10周年記念シンポジューム

●日時:11月22日
●主催:滋賀GPN
●対象:会員、一般
●テーマ:子どもたちの未来のために「買うならエコ!」でストップ地球温暖化
●会場:ビバシティ彦根2階ビバシティホール
●参加:250名
●講師:嘉田由紀子
●パネリスト:夏原平和、大道良夫、山仲善彰、藤井絢子
●展示:MOH通信

※敬称略

白無垢の伊吹

三山　元暎

さし絵：中川 善雄

湖北の冬は駆け足でやってくる。木の葉が散り、紅葉が空に舞うようになると、伊吹山は初冠雪を見る。今年の初冠雪は十一月三日。昨年より十八日早いという。

初冠雪を見るようになると、湖北時雨も頻度を増す。時雨が多くなるのは、大陸から季節風が吹いてくるからだ。日本海で暖められた冷たい風が対流を起こし、たくさんの積雲や積乱雲を作る。それが風に流されて湖北の空にやってくる。すると、にわかに空が暗くなって冷たい雨が降り、閑寂な趣がしたかと思うと、先ほどの雨が嘘のように明るい空が広がり、赤や黄に染まった里山がうるんでみえる。

私が子どものころは、この季節、刈り取った稲穂は農家の庭先にムシロを広げて干したものである。

干籾に欅の落葉柿落葉　　俳小星

このように自然の美しさが見られた一方、さあっと湖北時雨がきて、家族総出ですばやくムシロをたたむ光景をしばしば見かけた。この時雨、地球温暖化のせいか以前に比べ少なくなった気がする。秋の穫り入れ時期が早まり、農作業は近代化され、稲穂のムシロ干しも遠い昔の出来事になった。

晩秋の秋時雨がやがて時雨となり、日の光が白っぽく見えてくると師走。里山のコナラやクヌギの葉がすっかり落ち裸木になると、伊吹のお山は白無垢の装いを見せてくる。寒さも本番だ。

白さもて魅惑す朝の雪嶺は　　遷子

三山 元暎

●みやま もとあき＝1940年滋賀県坂田郡山東町（現・米原市）生まれ。長浜市の理事・経済部長を経て1995年8月から2005年2月まで山東町長。同月14日米原市誕生にともない退任。真宗大谷派真勝寺住職。

●なががわ よしお＝1936年生まれ。滋賀県展、長浜市展、伊吹を描く絵画展など入賞、入選歴多数あり。税理士。

本の紹介

最近入手した、気になる本・CD・DVDをご紹介します。

BOOKS

廃棄物列島・日本　深刻化する廃棄物問題と政策提言

●編者／畑明郎・杉本裕明
●発行所／世界思想社
●価格／2000円＋税
●内容／日本で多発する廃棄物処理問題。本書で扱われている事例には編著者が直接関わったケースも多い。

社員をサーフィンに行かせよう

●著者／イヴォン・シュナード
●発行所／東洋経済新報社
●価格／1800円＋税
●内容／100年後も続く企業とビジネスモデルの構築に必要なこととは何かを、パタゴニアの創始者自身が詳細に記した一冊。

知らなきゃヤバイ！　石油ピークで食糧危機が訪れる

●著者／石井吉徳
●発行所／日刊工業新聞社
●価格／1800円＋税
●内容／近い将来、石油生産が需要を超える「石油ピーク」が訪れ、そしてこれは「食糧ピーク」でもあると著者は警鐘を鳴らす。

電車と青春＋初恋　21文字のメッセージ2009

●編集／石坂線21駅の顔づくりグループ
●発行所／サンライズ出版
●価格／600円＋税
●内容／駅と電車で芽生えたロマンスをテーマに21文字の詩を募集。

地域がよくなれば国もよくなる

●著者／辻橋正一
●発行所／まちづくり実践塾
●内容／彦根市議会議員を経験した著者が語る、まちづくり改革論。

命をつなぐ250キロメートル ―抱きしめてBIWAKO―

●著者／作・今関信子
絵・おぼ　まこと
●発行所／童心社
●価格／1500円＋税
●内容／家族と離ればなれになり、養護学校「湖学園」に入った主人公・咲。児童文学作家、今関信子氏の活動の原点が小説化。

往来葉書　鬼のいる庭

●著者／岡田哲也・小林重予
●発行所／海鳥社
●価格／2200円＋税
●内容／詩人の岡田哲也氏と造形家の小林重予の往復書簡を忠実に単行本化。

おとうさんがおとうさんになった日

●著者／長野ヒデ子
●発行所／童心社
●価格／1300円＋税
●内容／家族全員揃っての自宅出産を願う家族。そこで「おとうさん」はこどもに、「おとうさん」になったときの話を聞かせる。

「循環型社会を目指す～M·O·H通信～」の発行に当たって

代表　森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。人々の価値観を情報操作で画一化して、特定のものに集中させようとするマーケット戦略は個人の人生観、社会観にまで侵入し、その独自性、不可侵性まで奪って行った。このことによって人々は哲学的な意味の自己をなくしてしまった。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する、こころとか思いを取り戻さなければならない。死生観や人生観、先祖や子孫、生涯をかける志、自己を自己らしく生き抜くための人生哲学など。そしてそれは自然との共生社会を目指すものであり、人としての真の生き様を問うものであらねばならない。

この実現のために
「循環型社会を目指す～MOH通信～」を発行する。

《 MOH通信概要》

■目的

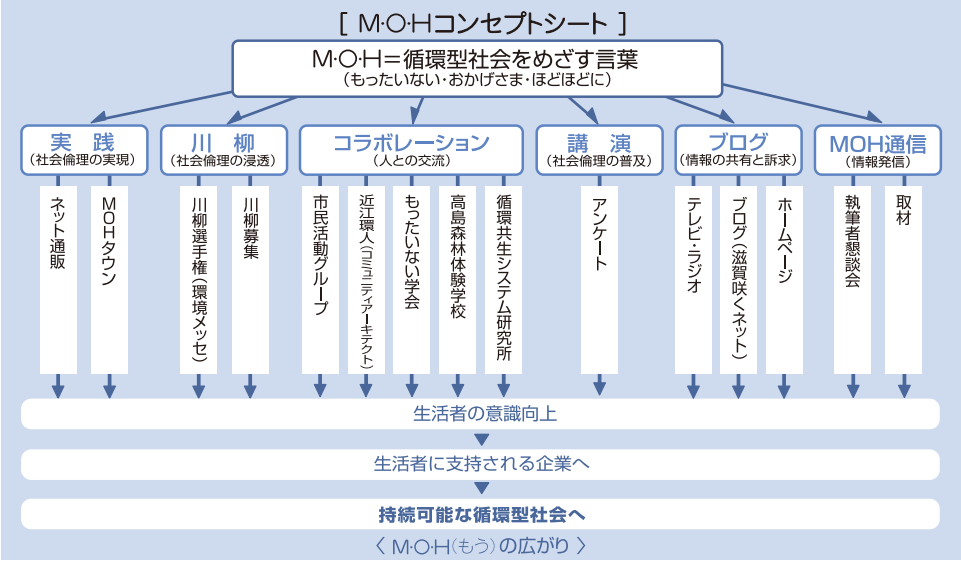
(1) 循環型社会構築に向けた意識改革
(2) 浪費型社会通念の脱却
(3) 人生哲学を学ぶ

■事業

(1) 通信の発行及び出版
(2) 講演会、勉強会、シンポジウムなどイベントの開催

■事務局

〒526-0111
滋賀県長浜市
川道町759−3
循環型社会システム研究所
TEL.0749-72-5277
FAX.0749-72-8681
e-mail:tsujimura@shingoshu.co.jp
代表:森 建司
担当:つじむら ことみ



読者の声

★ダンボールコンポスト、シソジュースに興味を覚えました。
栗東市生涯学習のまちづくり講座参加者

★湖周山遊会の会員に差し上げたく存じます。今後ともご交情をお願いします。
京都市　長宗清司

★日本の今とこれからを照らし続けるMOHが世界に広がっていくことを願って毎号感動でございます。
京都市　勝田慶雄

★大津友の会で「家事家計講習会」を滋賀県下10ヶ所で開催します。
大津市　丹原敦子

★全国レディス中央会滋賀大会では、琵琶湖とともに生きる滋賀の人々のやさしい心に触れる事ができました。
鹿島市　溝口恵子

★編集・取材に留まらず幅広い話を聞けて、学生はもちろん私自身も勉強になりました。
彦根市　田辺善美

★組織の中にいると見えないことも多く、様々な方のお話を伺うことで気付くことや、教えていただくことがたくさんあります。今後ともお知恵やお力を貸してください。
大津市　井上佳子

★読んでいると、滋賀に住みたくなります。最近の若い人は…というわけでは決してないのですが、あきらめムードを感じることも…。環境問題もあきらめたら終わり！と思って日々取り組んでおります。
大阪市　村上　芽

★事業の成長と環境経営を調和させ持続可能社会の実現に向けて商品と情報を積極的に社会に提供する、みなさまの真摯な姿勢に触れ、私どもの人生の糧となる経験でした。
東京都　花田容祐

★MOH通信の足跡が、しっかり広がっていますね。私も励みにいたします。比良里山クラブが法人化しました。
大津市　三浦美香

★草野社長と数年ぶりの出会いがあり、思い出話に花が咲きました。皆さんお元気で、小生も出席できたことを喜んでいます。24号の板倉先生との対談を懐かしく読みました。
枚方市　畑信夫

★びわ湖環境ビジネスメッセの環境配慮型工場見学では、お世話になりました。森会長の取組みにたいへん感銘を受けました。私が購読しています『主治医11月号』に「江戸のもったいないに学ぶ」が特集されており、貴誌とダブりました。めざすべき〝循環型社会〟の重要性・必要性を感じました。
長浜市　松浦政弘

★素晴らしい環境判例が二つありました。ポニョで有名になった「鞆の浦埋め立て差し止め判決」と沖縄の「泡瀬干潟埋め立て事業費用差し止め判決」です。どちらも行ったことがあるので嬉しいです。
大阪府　赤津加奈美

M・O・Hニュース

◆楽農舎平飼いたまご
安曇の恵（あどのめぐみ）（有精卵）
高島のお米とおからと安心野菜で育ちました！レモンイエローの自然な色の黄身と野菜の甘みが生きる卵です。農園では、卵拾いもできます。卵ケースは販売店で回収しています。
・施設／楽農舎なごみの里観光農園
・住所／滋賀県高島市安曇川町下古賀2579
・問合せ／☎090-1150-3659
・URL:http://homepage2.nifty.com/rakuno-shya/

《次号予告》
2010年3月発行予定

■特集：再生［地産地消］
●対談／「次代に引き継ぎたいもの」日本生命・宇野郁夫+森建司
●寄稿／「廃棄物の資源化」びわ湖の水と環境を守る会 畑明郎
●取材／「廃プラスチックの地産地消」県立大学・徳満准教授
●取材／「地球にやさしいパッケージとは？」三原美奈子
●取材／「おもちゃのリペア～宇宙へ」MetheE 地球の使者・石村宗一
●取材／「とれたて野菜を美味しくどうぞ」ガーデンレストラン
●滋賀発／「くらしのアイデア」マンガで伝える
●連載／通常通り
※ 敬称略、予告なく変更いたします

● 編集後記 ●

あけましておめでとうございます。
丑年は滞りなく終わり、寅年です。
スタッフ一同、皆様の輝かしい2010年を心よりお祈り申し上げます。
今年は、小誌にとってステップアップの年だと捉えております。皆様のご厚情にお答えできるよう、一層精進いたします。末永く、お見守り頂きご教導賜りますようお願い申しあげます。　ことみ

《M·O·H通信》受付中！

あなたも「M·O·H通信」を読んでみませんか。特典として、M·O·H通信、講演会のご案内をいたします。活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

あなたのお名前、年齢、郵便番号、住所、電話番号、fax（あれば）、e-mailアドレス（あれば）、あなたの心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

《M·O·H通信》申込書

フリガナ		年齢	希望冊数
お名前			
住　所	〒		
電　話	FAX	メールアドレス	
あなたの心に残った一言、MOH川柳をお書きください。			

※記入いただいた内容については、目的以外のことに使用または転用はいたしません。

キリトリ線

M·O·H通信　Vol.26（通巻27号） 2009年12月末日発行　発行部数6,000部

●編集・発行/新江州（株）
循環型社会システム研究所
M·O·H 通信編集局

代　　表　森 建司
編 集 長　つじむら ことみ
編集協力　稲垣 重雄
取　　材　細井 美保
　　古田 紀子
デザイン　伊達デザイン室
写　　真　辻村写真事務所
　　岡部 達平
印　　刷　プランセル
ホームページ　プランセル
ブ ロ グ　滋賀・咲くブログ

●執筆者懇談会
内藤 正明　畑 裕子
海東 英和　堤 幸一
山田 朝夫　進 ひろこ
下西 康嗣　中村 誠
末永 國紀　笹山 千怜
花田 眞理子　奥山 武生
弘中 史子　結城 美枝子
今関 信子　松崎 和弘
山崎 隆　井上 昌幸
三山 元暎　辻村 耕司
加藤 みゆき　佐々木 洋一
清水 安治　徳永 拓美
檀上 俊雄　中井 二三雄
中田エリカ　山口 美知子
（順不同・敬称略）

●ご協力
滋賀県
琵琶湖環境科学研究センター
循環共生社会S研究所
高島森林体験学校
麻生里山センター
近江環人＆環人会
もったいない学会
野洲生活学校
EEネット
中小企業家同友会
（順不同）

●支援
新江州（株）
〒526-0111
滋賀県長浜市川道町759-3
TEL.0749-72-5277　FAX.0749-72-8681
★ブログ　滋賀・咲くブログ★
http://moh.shiga-saku.net/
★ホームページ★
http://www.mohmoh.jp/

※記事中での写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。